

II. 研究報告

【1. 新潟県粟島浦村】

粟島しおかぜ地域共生プログラムの実践研究

高齢者のお手伝いプログラムを軸とした観光・産品開発・首都圏連携活動の創出



指導教員：地域創生学部地域創生学科 専任講師 出川真也

参加学生：

文学部歴史学科	4年	角田祐基
文学部歴史学科	3年	高橋咲紀
文学部歴史学科	3年	飯塚仁美
人間学部教育人間学部	3年	幅野裕敬
人間学部人間科学科	2年	須藤彩乃
人間学部臨床心理学科	2年	本多 龍
人間学部臨床心理学科	2年	兵頭衣織

※本章の内容は「H27～28年度新潟県大学生の力を活かし集落活性化事業」の支援を受けたものです。

I. 地域とプロジェクトの概要－前年度事業経過を踏まえて－

1. 粟島浦村について

粟島浦村内浦集落・釜谷集落は、人口350人余り、日本海に浮かぶ周囲20kmほどの離島である。本土側からは、新潟県最北端の市である村上市より汽船で一時間半ほどの場所に位置する。澄んだ海と豊富な海産資源、そしてかつては野生馬を産んだ里山の恵みが魅力だ。西海岸は日本海の荒波に洗われた岩礁地帯で、まさに絶景と呼ぶにふさわしい風光明美な景観が広がる。

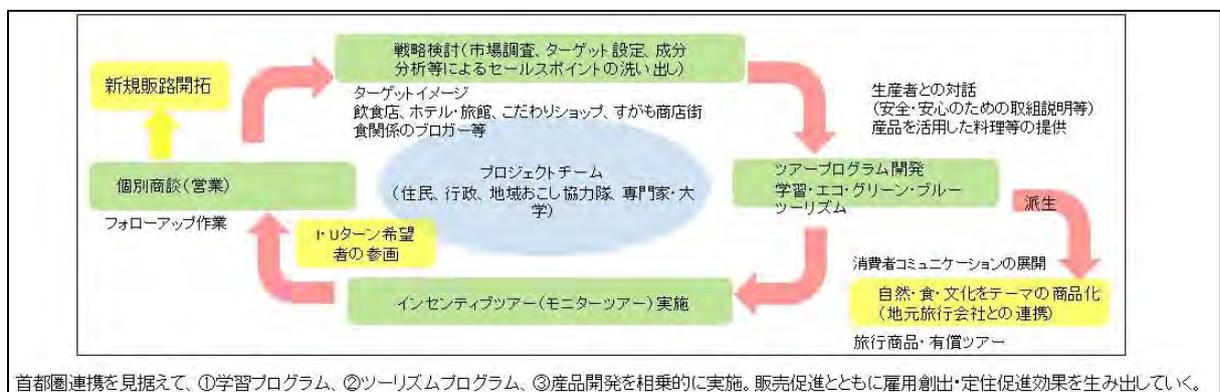
近年、過疎・少子高齢化が進んでおり島の人口は最盛期の半分以上となっている。若手の人手不足から島環境の劣化や里海における生業の低迷などが危惧されている。そのため、村では島外の子ども達を島の学校に受け入れる「しおかぜ留学」や島への移住促進につなげる観光事業など、島外の人々との連携協働による人づくりと島の活性化を模索し始めている。そのため島民と島外者が協力して、島作りのために共に取組めるもの（こと）の掘り起こしが必要であり、島外に暮らす地元出身者や島暮らしに興味をもつ若者等協力した地域おこしによる地域経済の活性化が求められている。

2. 事業全体（H27～28年度）の概要

（1）プロジェクトの概要

人口減少が著しい社会的条件の中、粟島においては離島の自然・文化的特性をいかしながら島内住民だけではなく島外者とも協働連携しながら取組んでいける新たな方策が必要不可欠となっている。

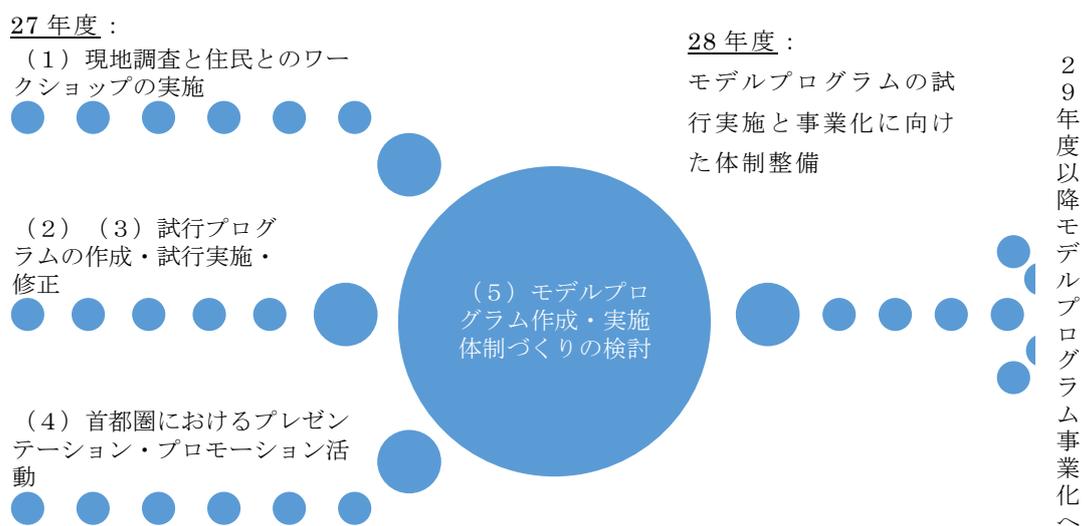
本事業では粟島浦村の地域に根ざした自然・文化・人材資源を活用し、島民とともに島外者が取組むことができる島づくりプログラムを作成することを軸に取り組みを進める（下図）。



プログラム作成のための調査、プログラムの試行、事業化に向けた体制整備検討活動を通じて、既存団体を含む活動体の組織強化を図る。あわせて首都圏連携を見据えた活動展開策を検討し、首都圏との連携を視野に入れた島内外の人材がかかわることができる新たな生業創出と、定住促進に向けたロードマップとビジョンを明確にしていく。

3. 前年度（27年度）事業の概要と課題

27年度は、プログラム作成のために島民と共に、①地域調査と調査に基づいた試行プログラムの作成、②プログラムの試行、③首都圏でのプレゼン・プロモーション活動、④事業化に向けた体制整備検討を行った（下図参照）。



以上の結果を踏まえて、島内外の参加者が協働できるものとして、主に島の高齢者が担ってきた里山・農業、手仕事（民具づくり）、郷土料理、共同作業・年中行事に光を当て、これらを構成要素とした学習観光プログラム「あわしまおじいちゃん・おばあちゃんとの出会いとお手伝い」を構想し取りまとめた（次頁参照）。島内の様々な身近な資源を島外者との交流の中で保全・活用していくことを構想したものとなっている。

あわしま

おじいちゃん・おばあちゃんとの 出会いと島のお手伝い

お手伝いプログラムの概要

夏島の美しい海は、里山や畑で採れた新鮮な野菜が島の気候に
よって育まれています。まさに夏島の思い出は、おじいちゃんおばあちゃんには
長年にわたって里山の手入れや畑を耕すことで、この美しい海を新
しうたてています。

このツアーは、島外からの来訪者と島の人たちとともに、里山・畑・共
同作業・各種手仕事・伝統行事などの参加型観光の新しいお手伝い
に取組むことを目指して、心を自然に元気にしていくプログラムです。

要旨
要旨浦村は人口350人余り、日本海に浮かぶ全周約20kmほどの離島の
村です。本土側からは新潟県北越前市である村上市で汽船で1時
間ほどの位置にあり、豊かな海と豊かな自然を資源として、かつては野
生馬を畜産した里山の島が魅力です。西海岸は日本海の元波に洗われ
た岩場と、東海岸はなだらかな里山と畑が、美しい風景と歴史を刻
きながら広がっています。

＜1日目＞

昼	要旨港到着 昼食とレクチャー
午後	プログラム1 里山・畑 共同作業から季節に応じて選別 ※雨天時はテゴ編み作り
夕	プログラム2 郷土料理教室・夕食

持ち物 服装等
野外活動に適した服装(長袖長ズボン)、エプロン(郷土料理教室)
帽子・手ぬぐい・入浴用具等

＜2日目＞

午前	プログラム3 里山・畑 共同作業から季節に応じて選別 ※雨天時はテゴ編み作り
昼	昼食・出発準備
午後	要旨港出港

東京から岩船港まで



村上駅から岩船港まで

バス

村上駅 約20分 290円
岩船上大町 徒歩10分 岩船港

乗り合いタクシー ※要予約

15分 中学生以上700円
小学生350円(未定学年無料)
乗車30分前までに予約
予約先: 要旨汽船株式会社 (tel0254-55-2131)

フェリー

普通船「フェリー要旨」 新高速船「Fawline ぎらら」
※高速船は要予約
予約・問い合わせ
観光案内所 tel0254-55-2146 受付 8:30-17:00
当日の問い合わせ先
要旨汽船
岩船 tel0254-56-7792 受付 7:30-17:00

本プログラムに関するご相談は、
随時と郵市を待つ地域づくり学習研究会
(六正大学地域構想研究所 出川)まで。
tel 03-5394-3048
fax 03-5394-3055
mail s_degawa@mail.tais.ac.jp

島のおばあちゃん・おじいちゃんお手伝いプログラム

①春: 畑仕事のお手伝い 3~10月
3月~5月種まき・6月~10月収穫
葉物類の収穫と、じゃがいも・えんどう・玉ねぎ・金時豆・かぼちゃ・さつまいも・長芋などの栽培のお手伝い。
島のお母さんたちと一緒に畑仕事をし、採れた食材を使った伝統料理に親むことができます。

②春: ワカメ採り・浜清掃・山道作り 3~4月
集落の大切な生業の一つワカメ採り。集落共同でワカメの収穫を行い、船で分け、干していきます。作業後の交流会でいただく生ワカメのしゃぶしゃぶは絶品です。
また、浜清掃や大工仕事が必要な山道づくりなど、島の暮らしに欠かせない作業のお手伝いをします。

③春: 山菜採りのお手伝い 3月~5月
里山を歩いて山菜の収穫。そして塩漬け・糠詰などの加工のお手伝い。山菜は月によって採れるものが違い、様々な収穫物を味わうことができます。また、作った料理は食べたり、お持ち帰りしたりできます。

④春・秋・冬: 郷土料理教室
山仕事や畑仕事の後は、その恵みを料理に。収穫したばかりの山菜や野菜を、要旨の海の幸と合わせていただくプログラムです。島のおばあちゃんたちから郷土料理、手料理を学び、一緒に夕食をします。

⑤秋: 畑仕事のお手伝い 10~11月
大豆・かぶ・大豆などの収穫と、にんにく・葉っぱの種入れ、キャベツの種入れをお手伝い。来春に向けて作物を植え付けたり、島の冬の畑について体験することができます。また、冬ならではの郷土料理を楽しむこともできます。

⑥秋: 磯道普請のお手伝い 11月
冬の岩海苔つみのための道づくりのお手伝い。海の裏手の山にクワなどを使って道を作り、冬でも海におられるようになります。また、磯道を使って収穫できる岩海苔・その他海産物を楽めます。

⑦秋: 里山再生のお手伝い 9~11月
竹、杉、雑木林の手入れをお手伝い。竹の伐採、杉・雑木林での薪取りをした後、竹灯籠やおもちや、ストーブ・ポイラー用の薪を作ります。作った竹のおもちやを持ち帰ることができます。

⑧冬: テゴ編みのお手伝い 12~2月
紐、カツラなどの植物で、ポシェットバッグのような万能物入れを編んで作るお手伝い。島のお母さんたちによく使われているテゴは、山菜採りや海藻採りにも役に立ち、カバンのように使うこともできます。
※雨天時のプログラムにもなります。

島外者もお手伝いできる島行事
島には100近い年中行事が存在していました。その中から島の方と一緒に楽しめる年中行事を5つ厳選。お手伝いプログラムと共に島人との交流を深めましょう。

- ① 乗り初め漁神楽 (1月11日) 漁師の祭り
- ② セツ (8月6日) 舟を流す
- ③ 盆踊り (8月13-14日) 楽しくおどる。事前練習参加者は太鼓・うたいも可能
- ④ 釜谷六所神社祭礼 (10月8日) 竹灯籠作り
- ⑤ 八所神社祭礼 (10月26-27日) 灯籠やのぼりを立てたり、神輿を担ぐ



Ⅱ. 本年度（28年度）事業内容と結果－お手伝いプログラム試行実践を中心に－

1. 事業目的－試行研究における2つの視点－

平成27年度は、首都圏連携を見据えた活動展開策を検討し、首都圏との連携を視野に入れた島内外の人材がかかわることができる新たな生業創出と、定住促進に向けたヴィジョンについて模索・検討した。その結果、島の里山・畑などの身近な資源、お手伝いプログラムを構想した。本年度は、構想したプログラムを試行実践し、実際に島民・島外者が取組める事業構築を図ることが目的である。

実施に当たっては、次の2つの視点を重視した。第1に、おじいちゃんとおばあちゃんの魅力と島の底力を引き出すための視点。島外者が島や島に生きる人々を知っていること、あるいは知りたいと思うことがお手伝いプログラムの基盤となるからである。目の前の相手が大切な存在だということにより、その相手の想いや魅力を汲むことができる。この Respect 〈尊敬〉の感情をプログラムの中でいかに育ていけるかということが試行実践のポイントとなる。

第2に、島内・島外者が一緒にかかわりながら共に学び・育つという視点である。ここでは、お手伝いプログラムの実施を通じて、島外者の学びや面白さ、尊敬の感情を湧出させていくとともに、それを島民も感じるようにすることで、両者が自己効力感や自尊心を育ていくことがポイントとなる。これは、短期的な観光では生じることはない。栗島に存在する自然文化人物資源の活用であり、いわゆる栗島の「島時間」の中でこそ培われるものではないかと考えられる。

以上の2視点を重視しながら、お手伝いプログラムの試行実践を軸とした調査研究を行った。また、試行実践を踏まえた首都圏での栗島のPR活動を実施した。

2. 事業経過

28年度の実践研究スケジュールは以下のとおり。

- (1) 栗島浦村における試行研究
 - 1) 第1回試行研究（栗島浦村）
 - 1日目 7月9日（土） 地域調査（地元学講習会）
自然体験学校スタッフと調査ノウハウを共有
 - 2日目 7月10日（日） 地域調査（地元学調査）の取りまとめ
自然体験学校スタッフをモニターとして調査体験。
 - 2) 第2回試行研究（栗島浦村）
 - 1日目 9月3日（土） 島内行事（運動会）の見学
打合せ（自然体験学校・全体行程等確認）
 - 2日目 9月4日（日） 里山（竹林）保全整備活動・海での体験活動
竹を使った流しそうめん 子ども達との交流

- 3日目 9月5日(月) 子どもたちと地元学習会
釜谷・内浦量集落でそれぞれ現地調査・発表
- 4日目 9月6日(火) おばあちゃん畑と食
季節の畑仕事の実施Ⅰ
郷土料理調査・試食
- 5日目 9月7日(水) 島内巡検・観光
- 6日目 9月8日(木) 防災訓練参加
夜、有志にてタコ釣り活動(2杯捕獲)
名古屋大学院生(野鳥研究者と交流)
- 7日目 9月9日(金) 伝統的な竹林作業・記録作業
テゴ編み体験・記録調査
- 8日目 9月10日(土) 11:10 粟島発
- 3) 第3回試行研究(粟島浦村)
- 1日目 11月12日(土) 畑作業の取材・調査
- 2日目 11月13日(日) 村資料館での情報収集
村役場にて今後の活動についての意見交換

(2) 首都圏における発信活動(東京都巣鴨・池袋・神楽坂)

1) 首都圏生涯学習施設での発信活動

10月29日(土)・30日(日)

豊島区生涯学習施設みらい館大明文化祭での展示・発表

2) 大学祭における発信活動

11月5日(土)・6日(日)

大正大学学園祭「鴨台祭」での報告・発表

3) 首都圏飲食店を活用した発信活動

2月25日(土)

神楽坂「離島キッチン」でのトーク&ワークショップイベントの実施

3. 粟島における試行研究内容と結果

(1) 「お手伝いプログラム」試行実施の背景

粟島浦村では、これまで地域振興策として島外者の受け入れを前提とした観光分野や、周辺海域を利用した漁業分野(海資源の活用)を主眼に置いてきた。

私たちの前年度からの取り組みでは、この観光・漁業の基盤となる島周辺の海洋環境は、島の里山・農地の健全な営みとつながっているものであることがわかってきた。しかし、島の里山・農地の担い手は高齢者となっており、高齢化と人手不足でその将来像が危惧されている。こうした課題に対して、「お手伝いプログ

ラム」では、島の高齢者が担う里山や農業の知恵技術の継承と人手不足の解消に寄与することを狙っている。

構想した複数のお手伝いプログラムから以下の3プログラムを選択し、試行実施した。

- 1) おじいちゃんと里山（竹林）保全整備プログラム
- 2) おばあちゃんの畑仕事と食
- 3) 「島の子どもたちとの地元学」

以下に詳述する。

1) おじいちゃんと里山（竹林）保全整備プログラム

粟島の里山では、竹林の荒廃が問題となっている。かつて良質な竹材を産出していた歴史があった。しかし、竹林管理・活用の伝統や技術は、産業構造の変化、人口の減少、高齢化等が相まって、消滅しようとしている現状となっている。本事業の中でどのように竹林管理していけばよいか詳しい方〈男性高齢者〉がご健在であることが分かった。「お手伝いプログラム」を通して、整備保全のためのお手伝い試行を行うとともに、伝統的な竹林整備方法について確認し記録した。

①高齢者の担う知恵・技術による伝統的な竹林整備試行実践

かつて島の竹林産業に携わった経験のあるおじいちゃんお二方に伝統的な竹林整備について教わった。粟島で受け継がれてきた伝統的な竹林整備を知っている方々であり、的確で力強いナタさばきで竹を伐採していた。竹林の現場できばきと指示を出していただき、切った後の竹の置きかたや倒す向き、理想的な竹林としていくためにどの竹を残していくかなどの具体的な指導をいただいた。





今回の活動では、参加した学生たちも果敢に竹に向き合い、最後のほうにはナタもノコギリも上手に使いこなすことができた。最初は鬱蒼としていた竹やぶが自然光の入る竹やぶに変わったのを実感したときは達成感があった。また、お二方からは好意的な褒め言葉もあった。今回整備したことにより、来年以降はタケノコがとれるかもしれないという言葉には皆‘やりがい’を感じた。栗島では、畑をしておかぜから守るため、伐採竹を材にして竹垣を利用しているところも見受けられる。新しい活用方法とともに伝統的な活用方法も改めて見直して、いかに伐採した竹の有効利用を図っていくか検討することが今後求められている。

②あわしま自然体験学校との協働による竹林整備プログラムの試行実施



本年度設立された「あわしま自然体験学校」では『バンブー体験』を体験プログラムに設定しようとしている。体験を通して、自然環境について考え、昔なが

らの工夫や技術についても学ぶことを目標としている。また到達課題として、自身の創意工夫する心を養うことを掲げている。

竹林整備は a. 伐採 b. 運び出し c. 余分な葉を落とす d. 加工という流れで行う。

a. 伐採では、最初手にしたノコギリの使い方が分からず苦戦したが、現地の方に教えてもらうなかで、比較的短時間でコツをつかむことができた。皆で声を掛け合いながら周囲の安全を確認し、竹を倒していく。

b. 運び出しでは、山の斜面から竹を引っ張り出し、トラックへ積載していく。伐採し切断した各3～4メートルほどの長さの竹を一人で引っ張り出し運ぶことは力も体力もいる本来つらい作業である。しかしこの作業を皆で行う中で、運動会の“竹取合戦”を彷彿とさせる楽しく感じることができるよう演出することが可能である。

c. 余分な葉を落とすという作業では、学生たちの多くが初めてナタを使った。指導に当たっていただいたのは島内の女性だが、ナタなどの道具の使い方は、自身の母や嫁ぎ先のお姑さんに教わったとのこと。周囲に十分に注意し、安全に使用しなければならないが、適切な使い方をすれば、腕力に乏しい女子学生でも簡易に葉を切ったり、適切な大きさにわることができた。

d. 加工では、小刀とナタを利用し、伐採竹で箸コップお皿などのオリジナルの食器を作った。作業を行っている時、牧場に遊びに来ていた数人の小学生たちが「何しているの？」と声をかけてきた。この小学生たちも上手な小刀さばきで箸を作り、丁寧にヤスリで竹をみがいた。また、大学生のなかには余った竹で竹トンボをつくり小学生に慕われる者もいた。なかには、自分の自転車の前かごに竹をさして帰る子もいた。現場の工夫で日曜大工的に様々な展開が可能であることが確認された。

以上の竹林作業の後は、作成したオリジナル食器や伐採竹で流しそうめんを行った。食器づくりを手伝ってくれた子たちの他にも島に住む小学生が食べに来てくれた。自分から流し役を立候補したりお手伝いをしたり、下の子の面倒をよく見ている子が多く、楽しい手作りイベントとなった。



粟島自然体験学校と連携したバンブー体験の試行実践の結果、竹林作業を行う以外にも、周辺フィールドでの活動やクラフトを利用した食イベントなどを設定することが可能であることが分かった。こうした一連の体験を通じて竹の手入れ

作業を楽しみながらその意義を理解することができるのではないか。また、初めての人たちや普段話さない人と一緒に具体的な作業を行うことは、コミュニケーションを深め、新たな発見、尊敬の醸成、参加者相互及び自分自身の理解促進につながるものと実感された。

2) おばあちゃんの畑仕事と食

島内の畑作業は小規模、多品種生産という特徴をもっている。そして高齢女性が主な担い手となっている。平成 27 年度のヒアリングでは、高度な機械での作業ではないため、島外者も参加できるものが数多くあることが分かった。今年度は、おばあちゃん 1 人のもとに 2 人の学生が赴き、お手伝いプログラムが運営可能か検証することとした。9 月、11 月の期間を変えて実施し、計 5 組のご家庭の協力を得て実施した。そのうち実施モデルとして 1 組について以下の通り詳述する。

①食のお手伝い

おばあちゃん的生活時間に合わせて、5時に起床。5時半には、内浦集落にあるハイシーズンのみ民宿を行っているおばあちゃんのお宅を訪問した。旦那さんは島外の市内の病院に入院し、子どもや孫たちも市内のほうに暮らしているとのこと。にこやかな笑顔と優しい物言いに遠くにすむ祖父母の家に訪れたかのような感覚を持った。

天候が荒れていたため、朝の畑仕事は食事をとってからとなった。朝ごはんのお手伝いを申し出たが 2 度ほど断られた。だが、簡単な食器出しを頼まれてからは、



食材を切ったり混ぜたりするお手伝いをさせていただいた。前日に畑で採ってきてくださったお野菜をたくさん使用し、豪勢なご飯が完成した。民宿をやっているだけあって、レパートリーに富んだ品々のレシピ本の料理より格段に美味しかった。食事をする中では、お孫さんのお話や島のことについてお話しした。

②畑のお手伝い

おばあちゃんは大の畑好きで、痛い足も畑にたつと痛くなくなるそう。実際よく手入れがされた大きな畑を家の近くに 1 か所、車でしか行くことができない山の上に 2 か所も所有している。移動に使う軽トラックを運転するための免許も 50 歳になってから一発合格で取得したとのこと。



私たちは、おばあちゃんに耕運機の使い方や熟している野菜たちの判別など一から教わった。そして畑の整備や種まきを一緒に行った。おばあちゃんは、教え切れないほどの果物から野菜まで幅広く育てている。各々の収穫時期や数年先の畑の敷地の使い方が、年間スケジュールで頭の中に完璧に入っていることには驚かされる。また、毎日の収穫を怠るとすぐ大きくなりすぎてしまう果物や野菜を私たちは適宜収穫した。一人で食べるには、あまりにも多いため、普段は人におすそ分けしたり、遠くに住む子どもや孫に送るとのこと。持ち帰った野菜で昼はかぼちゃのお餅などを教わるなど楽しいひと時を過ごした。



総じていうと、島のおばあちゃんは、学生の私たち以上にキビキビと動くことができるので、今回の試行実践では、「お手伝いプログラム」というよりは「体験プログラム」と表現したほうが正しいと感じた。また、収穫した多くの野菜たちをおすそ分けしてくださったり、私たちのために作業の世話をしてくださったりするなど、かえっておばあちゃんの負担が大きくなってしまいう可能性もあると感じ

じられた。一方で、おばあちゃん側からの要望としては、お手伝い要素として、野菜運び・背の高い果物の保護カバーつけ・風で倒れた野菜を立てること、きめ細かな草取り作業など、季節ごと営農段階ごとに具体的に挙げてもらうことができた。長期的で具体的な視点に立ってお手伝い要素を検討していくことで、畑仕事に素人の島外者でもその力を活かしていく可能性をみつけることができたといえる。

また、おばあちゃんからは「たのしかった」「ありがとう」「またおいで」という言葉をかけていただいた。学生たちの中には、普段早起きも虫も得意ではないし、まして畑仕事は疲れるし大変そうという印象を抱いていた者もいる。しかし、最初は上手にできなかつた耕運機を上手に使えるようになって褒めてもらったり、この日植えた種が3日後に芽をだしているのを確認したとき、誇らしい気持ちを感じたようである。取り組みの中に自己効力感を感じさせ自尊心を高めさせる力があることを示しているといえるだろう。



3) 島の子どもたちとの地元学—

今年度、島に新たに設立された「あわしま自然体験学校」は、島の自然・文化を活かした学習資源を観光に活用しようとプログラム開発に取り組んでいる。7月の第1回の試行研究では、あわしま自然体験学校のスタッフに対して、島資源の再発見活用策を考えるための手法を学ぶという趣旨で、前年度に取り組んだ地元学を自然体験学校のスタッフ研修として行った。さらに9月訪問の際には、島に住む子どもたちに島の魅力を見つめ直し知ってもらうために実施してもらいたいという村役場と自然体験学校からの要望で、子どもたちとともに地元学を実施



した。

①あわしま自然体験学校との地元学研修会（7月）

内浦地区において、地元の方や自然体験学校のスタッフと地元学を行う中で、多くの守り神、地元で見かけない多様なものが実っている畑、民家の軒先につるされた芸術的にかわいらしい玉ねぎ、小学生の時に遊んだ路地を彷彿とさせる狭い歩道などを見させてもらい、多くの不思議さや面白さを感じた。一緒に歩いている地元の方が、小学生を見かけると名を呼びかけながら、「仲直りしたんか？」と聞いたりするなど、島のコミュニケーションや近所づきあいの風景の一旦に触れることができた体験となった。

②子どもたちとの地元学（9月）

第2回目試行研究（9月訪問）では、内浦地区・釜谷地区の両地区において島の小学生と地元学を行った。午前中は内浦2チーム釜谷2チームに分かれて地元学を行い、昼食後、取材カードの整理を行い、「興味を持ったカード」を選び発表しあった。意欲的に取り組んだチームもあったが、一方的で子どもたちのなかには「なんで(地元学)するのかわからない」「つまらない」「特に歩いたところここ(粟島)にはなにもない」という声も聞かれた。7月の内浦での地元学とのギャップに最初驚かされたが、子どもたちの話を聞いていく中で、こうした思いがうまれる背景に子どもたちの多くが忙しいスケジュールの中で無理にこのプログラムに参加した者が多かったことを知った。

ここに、子どもたちにとってお手伝いプログラムや地元学等の地域学習活動を進めていく際の留意点が垣間見られる。島の子どもたちはそれらを遊び・知り尽くしてしまったから粟島がつまらない、なにもないと評価したのではなく、詰め込みの傾向があるプログラムに対する反動ではないかと考えられる。都会から訪問した学生たちは、島に来てから、天の川を肉眼で見ることができたことに感動し、太陽が海に少しずつ沈んでいくことに夕食の時間を忘れて見入ったり、自分のペースでのんびりと過ごすといったいわゆる「あわしま時間」の魅力を満喫してきた。こうしたゆったりした幅を持ったプログラムの実施環境が特に島の子どもたちには求められていると考えられる。

4. 首都圏における発信活動-「離島キッチン」でのイベントを中心に-

今年度は、「お手伝いプログラム」の試行実践とともに、首都圏と結ぶ活動にも注力し、豊島区生涯学習施設みらい館大明や大正大学学園祭「鳴台祭」での研究報告や展示発表を行った。

さらに、島根県海士町観光協会が運営する「離島キッチン」と共同で『【離島研究 × 離島キッチン】～大学生とめぐる『粟島』2時間ランチ会～』を開催。学生

による研究発表、移住者による体験談、栗島の料理による交流会を通し、栗島や島・地方の生活の魅力を探った。以下に詳述する。

(1) イベント概要

1) 日時・場所 平成29年2月25日(土) 東京神楽坂・離島キッチンにて

2) 実施体制

総括責任者 幅野裕敬(大正大学人間学部教育人間学科3年)

共同責任者 兵頭衣織(大正大学心理・社会学部臨床心理学科2年)

サポーター 高橋咲紀(大正大学文学部歴史学科3年)

サポーター 本多 龍(大正大学心理・社会学部臨床心理学科2年)

顧問 出川真也(大正大学地域創生学部専任講師)

3) 実施内容

① 研究発表

研究学生による調査で見つけた「栗島の魅力」、離島と都市を結ぶ「お手伝い活動」の紹介を実施。

② ワークショップ

隣席でグループを作成し、栗島体験カードを活用して、1泊2日の体験プランを作成。その後、グループごとに発表してもらい全体で共有。

③ トークセッション

Iターン者による「おむすびの家」のご紹介、栗島に移住した理由及び起業した理由をお話頂いた。

④ 県内大学である敬和学園大学からアマドコロ茶について紹介

⑤ 特別栗島ランチ御膳でランチ交流

⑥ アンケート記入(本報告書末に掲載)

(2) イベント結果

1) 研究発表

お手伝いプログラムをはじめとして、栗島での調査活動・体験活動の発表を行った。参加者の方々にお手伝いプログラムに興味を持って頂くことができ、プログラムの詳細やいつから参加することができるのか等多くのご質問を頂くことができた。お手伝いプログラムに対する需要の有無を確認する良い機会となった。

2) ワークショップ

ワークショップの実施により、参加者が栗島へ実際に行くイメージ、行った際の観光イメージを作っていただくことができた。また、都市部の方々が実際にどのようなプランを組むのか見ることができ、今後の研究活動の参考にしたい。

3) トークセッション

トークセッションでは、青柳さんから島外から粟島を見た魅力と島内へ移住して感じる粟島の魅力を語って頂いた。島内・島外、両方の視点をお持ちの青柳さんにお話頂けたことで、別の視点でも粟島の魅力をお伝えすることができ、参加者の方々へ、粟島の生の魅力をお伝えすることができたと思う。

4) ランチ交流

ランチ時は、座席での交流であったが、様々な方と意見交換や情報共有をすることができた。発表ではとりあげきれなかった粟島の魅力や取組の紹介を行うことができた。料理に関しても、参加者の方からは、満足の声が多く、食材に関するエピソードを研究会学生と一緒に話すことで関心をより高めることができた。

5) イベント全体をとおして

粟島のことを知らない方や「淡島」と勘違いしていた方など、粟島についての情報を殆ど持っていない方の参加もあり、本イベントの最も大きな目的である粟島のPRという点について微力ながら粟島の魅力を都市部の方々にお伝えできたのではないかと考える。



(3) イベント来場者からの感想から

イベント来場者からは数多くのご感想をいただいた。次に紹介する。

・3回程度粟島に行ったことがありましたが、新たな発見があり楽しく過ごさせていただきました。

- ・タラの刺身を島で是非味わってみたい。枝豆は素朴な味で飽きずに食べられます。粟島に興味・関心のある方々がこれだけ集まったのはすごいと思いました。まだまだ様々な取り組みの可能性があると感じました。
- ・とてもまとまっていて素晴らしかったです。
- ・ワークショップをしたことで、一方的なプレゼンよりも参加者が島へ行ってみるイメージが描けたと思います。お料理も美味しかったです。
- ・粟島についていろいろ知ることが出来た。何も無いからこそある魅力を感じた。
- ・粟島のこと以外にも、その関係者の方と知り合えてよかった。
- ・粟島の郷土料理を味わうことが出来た。
- ・学生さんたちのパワーを感じました。楽しい時間でした。
- ・学生の方、島に委譲して島の発展に携わって下さっている方たちに感謝の気持ちでいっぱいです。これからもがんばって下さい。
- ・参加者とたくさん話す機会があってよかった。
- ・若い人たちのフレッシュな感性に触れて、元気が出ました。大学の時にこうした活動をするのは良い。
- ・新潟人として枝豆は冷凍だとちょっと。。。最初にスケジュール説明や注意事項を入れるとか。最初の紹介がやや長い。
- ・世代を超えて粟島を話の中心に交流できてとてもよい時間でした。また、毎月「今月の島」と出して料理を提供している離島キッチンにとっても魅力を感じました。
- ・都会の雑踏の中で生活している若者たちにとって、離島での自然な時間の触れ合いは、大変有意義で貴重だと思うし、日本には600もの離島がありますのでこの活動を広げていってほしいと思います。
- ・島での体験、研究発表、これからの取り組み等々大変良かったと思います。島にある眠っている物を探して下さい。
- ・島の良いところをつまみ食したような楽しい間隔で、またお料理もとても美味しく満足です。
- ・離島が大好きで卒業論文テーマを離島にしようと思ったこともありましたが、一人で行うのは自信が無く断念してしまったので、少し研究室の皆さんがうらやましいです。私的な出合いを有難う御座います。
- ・離島キッチンはもともと興味があったのでこれで良かったです。学生さんたちから生の声として、島での出来事や感じたこと紹介してもらえて良かったです。
- ・真鱈は癖が無く、油が乗りおいしいので、フライなどは是非商品化していただきたいです。
- ・粟島のじゃがいもを食べてみたいです。粟島ファンを増やしたい。

・その物を感じ、その土地を感じ、とても素敵な商品だと思いました。

(4) イベント運営学生の所感から

イベントの運営に当たった学生の所感を以下に紹介する。

①兵頭衣織

参加者は熱心に大学生の話に耳を傾けてくださり、栗島らしさを伝えることができたのではないかと感じた。

ワークショップの班では、昨年栗島に三度訪れてから大ファンになった男性、別の「あわしま」と勘違いして参加した若い女性、旅行が趣味の男女など出身地・動機が様々な方が栗島について思いを馳せることができた。【一泊二日のプラン作成】においては「二泊三日にしよう!」という話もでたり、サップ(スタンドアップサーフィン)をやってみたい・あわ島のあわにかけてバブルラン等の都会的な若者らしい意見もあった。また、プラン作りの中では「ぼんやり過ごす時間がほしいなあ」などの長期滞在を希望する方もいた。やはり海の活動が人気で、竹などの活動は安全面の心配や時間についての質問が多く出た。気付かなかった意見や新しい視点が多くあった。

発表では、とても緊張してしまいましたが、栗島の雰囲気や島外者・栗島一ファンとして自身の思いを伝えることができました。ハナコさんが時間の話にふれてくださったり、アンケートにも離島と都市の比較をしてくださる方がいた。

お食事の中では、栗島の村長さんのお姉様と旦那様、お子さんが離島高校に進学している方、地域おこし協力隊を希望する女性などが美味しい食事をきっかけに栗島について活発な意見交換をしてくださった。アイランダーを知らない方がいらっしやったり、料理の作り方を教え合ったり、都会にいなながらも離島に触れたい方は多いのではないかと感じた。

たくさんの方の協力のおかげで、このような素敵な企画をつくりあげたことに感動した。また、大学生だからできる企画だなと感じた。

②本多龍

離島キッチンイベントでは、参加者は地元の常連さんから、その友人である福岡に住んでいる方、他多くの方にいらっしやっただき、多くの人に栗島の存在を知ってもらえたと感じる。活動報告の後に行ったグループワークは4班になって行った。そこでは夕焼けと星空の観賞を入れている班がほとんどで、みなロマンティックなものに興味があるのだと感じられ、夕日や星空も栗島の自然の一部なので観光資源や自然体験プログラムの一つに十分入れることが出来ると考える。これに関連して、船の上から夕陽を見たいという意見が出ていた。今回の話し合いのテーマが自分たちで旅行の予定を考えるというものの為か、研究会の発

表にあったお手伝いプログラムについて触れる人は私がお話を聞いた人の中にはいなかった。私は調査という形で栗島に行っていたので、何が島のためにどんなことに使えそう、といった視点で見ている。だがこのイベントでは参加者の方々がどのように島を楽しむかという視点で見えており、楽しそうに話をしていたのでここからもっと栗島の事を知ってほしいと感じた。

③高橋咲紀

私は、主に参加してくださったみなさまとディスカッションをさせていただきました。発表の時点から、栗島がどのような所なのか興味深く聞いていらっしゃる方ばかりで、一泊二日のグループごとにツアープランを考える際にも積極的にたくさんの意見を出してくださいました。使用したカード以外にも違った活動ができるのではないかなど、学生では思いつかないような活動もあげてくださったので、今後の我々の活動の参考にもなる良い時間を過ごすことができました。また、印象深かったことは、同じ班でディスカッションをしていた女性の方が、「こんなにもできることがあると一泊二日ではもったいないね」とおっしゃっていたことです。この言葉を聞いて、栗島には夏の海水浴や釣り以外にも楽しめることがあるということ、都市部の方に少しでも伝えられたのではないかと非常に強く感じました。

(5) イベント総括と今後の課題

都市部でのPRという点において概ね成功と言える結果となった。集客に関しても、栗島浦村の皆様をはじめ、多くの方々のご協力により、当初予定の20席を超え30名近い方々にご参加いただき、満席とすることができた。内容に関しても、比較的好意的な意見が多く栗島の魅力を伝えることができる内容であったと考える。

課題として、進行に乱れが生じた個所が数か所あったことや料理との兼ね合いもあり終了時間が押してしまったこと、不測の事態への対応の遅れ等が挙げられる。今後に向け会場をコントロールすることが難しくなった場合の対処法を考える必要がある。

5. 事業結果の考察

(1) お手伝いプログラムの事業化と活用可能性

本事業の結果、次のことが明らかになった。

1) 島外者におけるプログラム可能性について

試行実践の結果、「お手伝いプログラム」の取組は、島外者でも行うことが可能だということが明らかになった。新たにイベントやプログラムを構築するという

ことではなく、既存の島の日常的な暮らしを題材にしている本活動は、島民の営みの一部に島外者が参加可能か（つまりお手伝い可能か）どうか最初の条件となる。前章で確認したように今回プログラム試行実践に参加したモニター学生の動向をみると、里山（竹林）、農業（畑）、食、さらに工芸品づくり（てご編み）や集落行事など、最初の取り掛かりに戸惑う場面は見られるものの、すべての試行実践において当初予定の活動をやり遂げていることから、事業化を十分に検討できると考えられる。

2) 島民（おじいちゃん・おばあちゃん）におけるプログラム可能性について

島民（おじいちゃん・おばあちゃん）にとって本プログラムは、人手不足や知恵・技術の継承という点でメリットがあることが実施のための条件であると考えられる。今回の試行実践の結果、人手不足の解消（つまりお手伝い）という点では、十分な効果が見込めるかどうか不透明なプログラムもあることが分かった。また、島の営みに不案内な島外者を受け入れるにあたって、むしろその準備や説明のために負担が増してしまう可能性があることも明らかになった。

3) プログラムの事業化のために

プログラムの本来目的である人手不足や知恵・技術継承といった効果を高めるための、具体的なモデルプログラム、事前教材や手引書、島外者とおじいちゃんおばあちゃんをつなぎプログラムを運営するコーディネート体制が必要である。このため、本年度試行実践を行った里山（竹林）、農業（畑）、郷土料理について、補助教材の試案を作成した（本章末資料参照）。

4) プログラムの波及効果と活用可能性

島外者にとって、お手伝いプログラムは、単なる手伝いのみならず、島の暮らしや生活の営みについて理解を深める学びの要素が大きいことが明らかになった。プログラムを通じて、島民とのコミュニケーションや、島の営みの実物に触れることや「お手伝い」という島へ寄与している感覚がもたらす楽しさや喜びが得られることがわかる。こうしたお手伝いによる島への貢献だけでなく、むしろ島外者が享受できる島から学びといった効果が着目される。これは首都圏での発信活動においても実感されたことでもある。

一方で島民（おじいちゃん・おばあちゃん）にとっては、本プログラムを行うことによって、自分たちの日常的な営みに新たな光を当てることにつながる。それは島外者の目線の違いを利用して、自分たちがこれまで受け継ぎ育んできた知

恵や技術を再評価・再発見していくこと、そのことによりこれまでの人生を統合し、彼らにとっても英知を得る効果をもたらす可能性があると考えられる。¹

本プログラムは、単なる島の環境や生業の保全継承といった機能にとどまらない効果があるといえよう。今後、こうしたプログラム試行実施の中で垣間見られた「島の教育力」（島民・島外者双方にとって学びを促進する力）の波及効果や活用可能性をさらに検討していく価値があると考えられる。

（２）参加学生から - 試行実践モニターとしての感想を中心に -

以下に、「お手伝いプログラム」試行実践のモニターとしての役割も担った参加学生からの所感を次に紹介したい。

1) 学んだこと一島の魅力と島の生きてきた人々ー

9月上旬に実施された最も長期にわたった第2回目試行研究は感慨深い。滞在していた8日間、粟島は夏から秋へ景色を変えた。海の魅せる顔や空の高さ、吹き抜ける風によって、小さな変化が大きな実感を生む。四季をここまで強く感じたのは20年生きていてはじめてだった。粟島にいと自然だけではなく、多くの変化に気付くようになる。島に暮らしている人々のやさしい眼差しを感じるからだろうか。自分自身を省みることや他者の良さ、クセに気付くことが増えた。出川先生の主張していた過疎地域の農山村の魅力的なコミュニティやチカラとは、個人にそのスポットが当てられていることなのかもしれない。また、そのスポットが自分にもあてられるということなのかもしれない。

2) プログラムがもたらす効用一島の魅力と島の生きてきた人々に触れるー

『俺がいまマリオなんだよ』島に来て子はゲームに触れなくなりぬ」俵万智という短歌がある。粟島は、暮らしやすさや派手な楽しさとは程遠い。でも、ここで生きている人々はみんなが主人公で、きらきらしている。ナタの使い方もかぼちゃの切り方も知らなかった私も“何も知らない私を知る”ことでどんどんきらきらしていく。普段、家と駅の往復しかしない私が空いている時間があれば散歩に出かけ、道行く人に声を掛けられたり声をかけたりする。粟島に来て、自己肯定感の形成のプロセスや自尊心の重要性を知ることができた。

3) 新たな課題一島の子ども達とのかかわりからー

¹ 高齢期の学習特性に関連してエリクソンは「個人が高齢期に遭遇する様々の危機に直面し自らの課題を解決する過程は、同時にその姿を見ている若い世代をも育て、将来彼らが高齢期を生きるうえでのよきモデルとなると指摘」（鈴木真理他2014「生涯学習概論」p.85）している。

実は、地元学の際に大学生メンバーがかかわった中にはあまり楽しそうではなかった島の子ども達がいたことに気づかされた。これは粟島に限らず私たちが出会う各地の地方地域の若者たちや子ども達に共通する側面でもある。しかしある子どもが島の魅力が理解できず、不便さを嘆いているばかりだったことが印象に残っている。ことによると彼らのおかれた環境〈しおかぜ留学が大多数〉も影響して、プログラムに対し拒絶感や強制感を感じるということがあるのかもしれない。私自身も島内者に「何しに来たの?」という質問を投げかけられることも多くあった。島内者にとっては、島外者が島を訪れてくれることを好意的に思っている反面、様々な不便さやギャップ、違和感を抱いていることに気が付いた。本来であれば、しおかぜ留学により島を訪れた島外出身の子どもたちが島を知り、島の資源を活用し、学んでいくなかで島内者や粟島にとっても新たな学びが生まれる状況が創造できると思う。しかしプログラムに固執して学ばせるという構造は互いの亀裂を生じさせがちな側面も併せ持っている。

子どもの会話の中では、「キャンプをしたことがない」という話があった。島にとって必要なのは、子どもたちと島内者の相互的で好意的な関係性であり、そこをなくしては今後の島外者とのプログラムでの有益な交流は見掛け倒しに終わってしまうのではないかと思った。そして子どもたちにとっていま本当に必要なのは、島の人にとっては普通の「粟島暮らし」や「粟島での思い出」であり、粟島に対する素直な尊敬と素敵な体験の一つ一つだと感じている。

4) 島に根差した学びの必要性—島の高齢者の子ども時代の話から考える—

島で店を営むあるおばあちゃんとのエピソードを紹介したい。彼女は生まれも育ちも粟島で、粟島の背景や歴史をよく知っていた。貧乏だったこと、島民たちが標準語を学ぶ過程、島の小学校のことなど幼少期について特に教えてくれた。山越えをする通学に一日の大半がとられ、家事をお手伝いしたり畑仕事を手伝ったりするなかで、忙しく自分の時間というものが少なかったそう。けれど、近所の子たちと道端で遊んだことやおにぎりをつくって海を見ながら食べたこと、男の子が木登りして食べ物をとってくれたことなどが印象深いと笑顔で話してくれた。

また、釜谷で散歩をしていると漁師になりたてというおじいちゃんたちが、秘密基地の話をしてくれた。「秘密基地は秘密だからいいんだよ。詳しいことは教えてあげない」と軽い冗談を交えながら懐かしそうに話してくれた。島には、大人にばれないような素敵な隠れ場所がたくさんあり、海に流れ着く宝物や流木を使っていたのかもしれない。

島という独特な自然環境の中で、おばあちゃんやおじいちゃんたちは、より楽しむために様々な努力や体験をおこなっていた。

5) お手伝いプログラムを基盤とした新たな展開を

島という独特な自然環境の中で、お手伝いプログラムのおばあちゃんやおじいちゃんたちは、より楽しむために様々な努力や体験をおこなっていた。子どもたちに20歳の私が聞いても面白そうだなと感じる「みんなでわいわいにご飯をつくって外で食べる」や「大人が関与しない空間を自分たちで作る〈基地〉」を島の子どもと行ってみたいと思った。学びが先に来るのではなく、遊ぶことに学びが含まれている。そのような形で島の子どもたちとおじいちゃん・おばあちゃんをつなぐことができる仕組みを考えられないだろうか。(臨床心理学科2年 兵頭衣織レポートより)

Ⅲ. 総括と提案 - お手伝いプログラムを軸とする多世代協働コミュニティ創出 -

大正大学出川真也研究室（地域創生学部・社会教育・生涯学習論担当研究室）では、平成 27-28 年度にかけて本事業に取り組んできた。

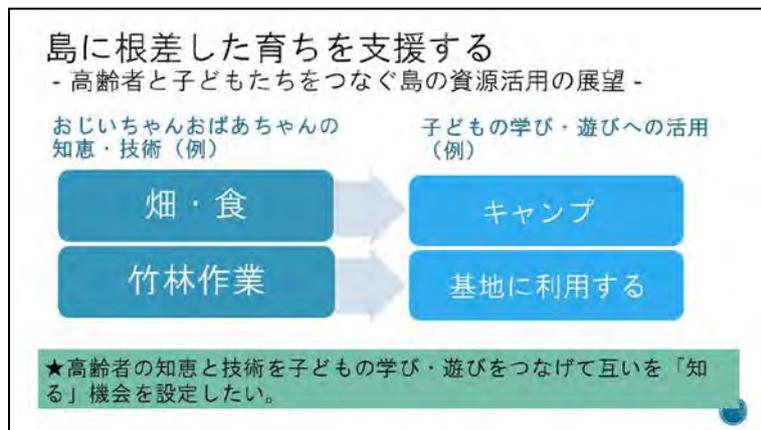
27 年度は、私たち島外者が関心を持って島民と取り組めるものとして里山（竹林）、畑、食文化、伝統行事や共同作業等を掲げた「あわしま おじいちゃん・おばあちゃんのお手伝いプログラム」（以下「お手伝いプログラム」別添資料参照）を構想した。28 年度はこのプログラム試行実践するとともに、首都圏での発信活動を行う中で、高齢者の担う知恵や技術を生かした活動には、周りの学習を促進する魅力があることが明らかになった。一方で、島の子どもたちは島の自然・文化に対する関心が必ずしも高くなく、島の良さや島に根差した知恵・習慣を知らない面があることに気づかされることとなった。

以上から、今後は、子ども達をはじめとした若手島民が、高齢者が受け継いできた島の自然・文化の魅力と価値を再認識できる具体的な取り組みや環境づくりが必要だと考えられる。粟島浦村では「島民による粟島創生戦略」（H28.3）において「島の子どもが先輩と遊び、学べる機会づくり」を掲げている。今後の「お手伝いプログラム」を真に島の地域作りに以下していくために以下の取組みを提案したい。

1. 提案概要—粟島の高齢者と子ども達をつなぐ学習プログラムの構築と実践—

（1）子どもたちが活用できる島の高齢者の知恵・技術の発掘調査

高齢者や子どもたちと協力して、島の高齢者が担う自然・文化・歴史的資源の調査を行い、子どもたちが関心を持って活用できるような方策を検討。検討結果を「島の高齢者と子どもたちをつなぐ学習プログラム」として整備する。



（2）「島の高齢者と子どもたちをつなぐ学習プログラム」の実践

「島の高齢者と子どもたちをつなぐ学習プログラム」を実施する。実施に当たって、「お手伝いプログラム」の知見を活用していく。

(3) 島内の若手組織を軸とする多世代協働のしくみ作り検討会の開催

調査やプログラム運営を通じて高齢者と子どもたちの絆を形成するとともに、運営面で若者が取り組みに関われる仕組みを検討する。島内の若者組織と意見交換を行いながら、島の子どもたち、高齢者組織、若者組織、都市部等島外の若者組織（大正大学の地域創生学関連の学生研究会ほか）がネットワークを組んだ持続可能な協働体制を構築していく。

2. 実施方針

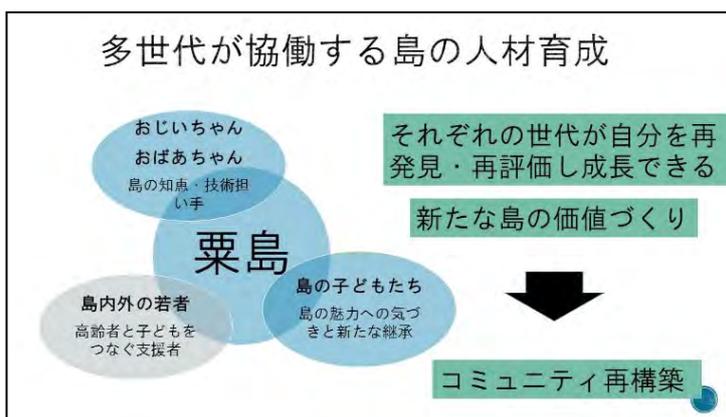
事業の実施に当たっては関係する島民のニーズに寄り添いながら、協働して取り組むとともに、島内外の若手世代層を巻き込んで継続的に事業実施できる仕組みを構築することが必要。以下の3点が実施方針として考えられる。

- ① 高齢者・子どもたちのニーズ把握に努め、寄り添う姿勢
- ② 高齢者・子どもたちとの協働による事業実施
- ③ 島内外の若者組織の参画促進と活動の継続性の確保

3. 期待される効果

島内の高齢者が担ってきた知恵や技術に対する子どもたちの関心が高まるとともに、現状では高齢化や人手不足のために継承が危ぶまれている島内資源の保全活用が促進されることが期待される。このことは現在島ぐるみで取り組んでいる離島留学制度の教育効果をさらに向上させたり、子ども・高齢者・若者の協働やコミュニティ意識の醸成を促すものと考えられる。

これらは村が「島民による粟島創生戦略」で掲げている「新たなコミュニティ～多様性を前提としたコミュニティの再構築」「島の子どもが先輩と遊び、学べる機会づくり」の実現につながるものと考えられる。



多様な世代の協働による人材育成とコミュニティの再構築

4. おわりに

以上の提案を本事業の総括にかえさせていただくと共に、私たちと島の皆さんとの今後の研究・実践課題としていければと願っている。

これまで2年間にわたって共に取組むことができた島の皆さん、首都圏の協力者の皆さんに感謝したい。

【2. 新潟県阿賀町】

地域青年会との協働による若者の 山村ー都市交流と新たな地場生業の創出



指導教員：大正大学地域創生学部地域創生学科 専任講師 出川真也

東京農業大学多摩川源流大学プロジェクト事務室学術研究員 杉野卓也

参加学生：

文学部歴史学科 4年 角田祐基

文学部歴史学科 3年 高橋咲紀

人間学部教育人間学部 3年 幅野裕敬

人間学部人間科学科 2年 須藤彩乃

人間学部臨床心理学科 2年 本多 龍

人間学部臨床心理学科 2年 兵頭衣織

東京農業大学 井口春海

東京農業大学 新井 朋

1 はじめに

H28 年 4 月に設置された大正大学地域創生学部地域創生学科では、地方地域と都市地域の連携・協働による地域創生の実現に寄与するための研究・教育活動を開始しました。特に地域に根ざした多様な活性化活動に取り組むことができる地域人材の育成を目指しています。

本学部には所属する大川洋史研究室・出川真也研究室では、地域住民のアイデア創出が重要な意味を持つとともに、それら住民を構成員とする地域組織のあり方が集落活性化のための戦略的行動に大きな影響を与える点に着目して、人的資源管理や経営組織論を基盤とした研究を進めています。こうした研究を応用して、地域資源（人的・物的）の掘り起こし、外部とのネットワーク形成、地場に根ざした生業の構築といった面で、住民が主体となって集落活動を効果的に展開するための組織化や地域活性化方策について提案し実践方策を模索していきます。

本事業では、地域での交流と学習活動に取り組む東京農業大学源流大学プロジェクト事務局と協働しながら、新潟県阿賀町室谷地区の青年会の皆さんと共に山村資源を活かした地域活性化推進方策について検討していきます。

1-1 集落概要

- 集落名：新潟県阿賀町室谷地区
- 人口：115 人
- 世帯数：29
- 高齢化率：35.6%



1-2 「集落」の課題

- 過疎化高齢化に起因する集落活動の減退や地域資源保全管理
- 一方で、集落内の若手世代層を中心に構成される「青年会」による新たな活動展開の萌芽が見られることが注目される。

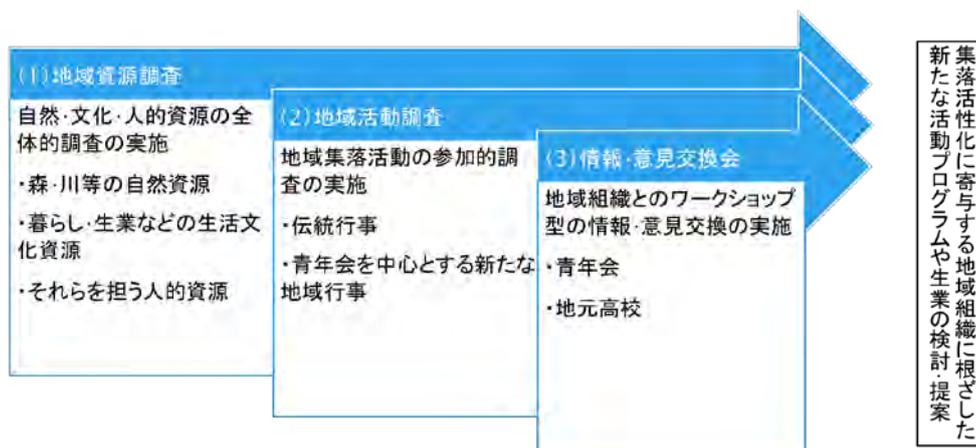
1-3 調査研究の目的

- 青年会がチャレンジ素養としていることに寄り添い、構成メンバーと協働しながら研究調査活動を実施する。
- 青年会・若手世代層が軸となって地域活性化に寄与するための集落の自然。文化的資源に根差した新たな活動プログラムや生業を提案する。

2 本年度事業の取組内容

2-1 本年度事業の流れ

研究目的を達成するため、現地集落にて青年会を中心としたその他地域組織等と連携・協働して(1)地域資源調査、(2)地域活動調査、(3)意見交換会を実施する。それらを踏まえて分析・検討し、新たな活動プログラムや生業の企画提案をおこなっていく。



2-2 事業結果概要

2-2-1 地域資源調査・地元学 (資料編の調査データ参照)

青年会・住民と集落の資源調査を実施し、山林、川、食文化、住まい・暮らし、道具などの掘越を行った。

食文化では、地元の食材、山菜を使った郷土料理を作って頂き、食べる時期や調理法、山菜の価値についてのヒアリング調査を行った。山菜についてのヒアリング調査では、室谷区のぜんまいは日本で最も大きく室谷地区のぜんまいの大きさに等の出来によって、日本のぜんまいの価値が決まってきたというお話もお聞きすることができた。

川文化の調査では、実際に漁の様子を見学させて頂き川の生物調査を行うと同時に、漁の仕方を教えていただいた。



また、道具小屋も見せていただくことができ、漁に使う編み等も拝見させて頂くことができた。

山資源調査では、実際に山の中を歩かせていただき、山林の様子を説明して頂いた。木材資源の活用方法をお聞きし、炭焼窯も見学させて頂いた。



2-2-2 地域活動調査

(1) 9-10.11 室谷祭礼伝統行事神輿担ぎ、その後のお楽しみ会開催のお手伝い

実際に、御神輿を担がせていただき、集落内をめぐらせて頂いた。一軒一軒、飲食物が出され、それを飲みながらのお祭りに教員をはじめ殆どの学生がダウンした。飲めなくなると、ビールかけや水かけになりびしょ濡れになりながら集落内を回った。その後のお楽しみ会では、地域の子どもたちに対し、くじびきや射的、フランクフルトの販売のお手伝いなどを行った。子どもたちがとても楽しいように参加している姿が印象的であった。

青年会をはじめとする地域の方々が、大事にしている雰囲気や青年会の考え方・気風といったものを肌で感じることができた。青年会が目指しているところや求めている形は、我々研究室が求めていく方向性とイコールになる。その、方向性を改めて認識することができたお祭りであった。



(2) 10-8.9 おもっしえぞ祭り（旧神谷分校学芸会）開催のお手伝い・見学取材・出演

お祭り当日は売店など朝の準備からお手伝いをさせて頂いた。また、突然舞台上に上がることになったりとたくさんの経験をさせて頂いた。お祭りには子供からお年寄りまで幅広い年代が参加しており、青年会の方々だけではなく子どもたちや女性の方々とも接することができた。歌や踊りなどの出し物の他、子供たちが昔話を地元の方言を使っての朗読などがあった。青年会の方々による舞いはとても力強くとても印象的だった。お祭りの終わりには、青年会を中心とし

た祭りを盛り上げた方々との宴会があり、また室谷に来てと言われた時はとても嬉しかった。

私たちも楽しませていただき、皆さんの室谷に対する熱い想いや地域の連携をひしひしと感じたとても魅力的な祭りであった。そして、このように老若男女たくさんの人々が参加し、楽しむことのできる集落行事はなかなかないのではないかと強く感じた。



(3) 冬の生活 ・生業ヒアリング 等

副区長や昭七さんのご指導のもと、雪かきを行った。初めて雪かきを行う学生も多く、とても苦労した。素人が下手に雪かきを行うのは危ないと、昭七さんから早々の撤収を命じられ、生活文化のヒアリングを行った。



昭七さんからは、かんじきの作り方を教わる事ができた。昔は、集落内の誰もが作ることができたそうだが、今では作れる方の方が少ないということだった。その他にも昔の生活生業をお聞きすることができた。



● 昔の生業ヒアリング結果

- ・ 1月：休み
- ・ 2月中旬(11日以降)から3月：山へ入り木材調達
- ・ 3月：木材を川へ流し下流へ
- ・ 4月：木材を業者へ（やっとお金になる）
- ・ 5月：休み
- ・ 6月～12月：炭焼き釜作り(約2週間かかる)→炭づくりを繰り返す
- ・ 畑、田んぼは自分たちで食べる分を栽培→現在は販売も実施

・ぜんまい栽培

● もらい風呂ヒアリング調査

2月の調査活動のうち、1日はもらい風呂として、集落の方々のお家でお風呂を頂いた。

夏には運動会があって子供から大人まで集落の人がほとんど参加していたというお話や冬にかんじき大会が3月頃にあり、こちらも子供から大人までレースに参加したという昔の行事についてお話をお聞きすることができた。

また、冬の暮らしに関しても様々なお話を伺うことができた。冬の暖炉の組み立ては基本的には自分たちで行い、1日に20個ほどの薪を消費することや夏に貯めた薪は縦2m横2mほど（これが6つある）の物置に積み重ねておき暖炉が必要なくなる4月までにだいたい使いきるなどのお話を伺った。薪ストーブの長所はすぐ温まることであり、短所は消したらすぐ冷えることと地震時に火事になりやすいこと（電気ストーブなら自然と止まるけど薪ストーブは止まらないから）など薪ストーブについても詳しくお話を伺うことができた。

食文化についてもお聞きすることが出来、くじなという煮物があることや沢庵を漬けるときに大根の葉も一緒に漬けると美味しいこと、またなめこ、まいたけ、アジは缶詰にして保存食にすること等を伺うことができた。

2-2-3 情報・意見交換会（資料編 レジューメ・紙芝居資料参照）

(1) 青年会をはじめとする地域住民との情報・意見交換会

意見交換会は、伺うたびに実施させて頂き合計で5回行わせて頂いた。1回目には、地元学の結果を共有し、調査結果の活用方法を検討した。2回目には、都市部との連携方策について検討し、大学でのイベント実施の可能性や豊島区社会教育施設である、みらい館大明との連携活動等について検討を行った。3回目には、イベントを通じた地域活動の今後の展開について意見交換を行った。4回目では、調査結果の最終報告を行い、5回目には、今後の活動検討を行った。その際に、イメージ紙芝居資料（本報告書末掲載）等を用いながら青年会会長指揮のもと、ふるさと学習キャンプの実施について検討会を行い、運営方法や実施体制、プログラムの策定などを検討する企画会議を行った。

室谷内で実施が可能であり、青年会の方々をはじめとした地域住民の方々の負担になってしまわないよう考慮することはもちろん、如何に室谷の魅力を高校生

へ伝えていくかを検討した。そして、青年会及び青年会活動の充実を図れるようなプログラム設計を行った。

(2) 阿賀黎明高校へ調査報告

阿賀黎明高校の校長先生、副校長先生へ今年度の調査報告及びヒアリング調査を実施した。ヒアリングの際に、ふるさと資源を生かした教育プログラムを模索中であることをお聞きすることができた。

また、高校生と座談会の時間も取って頂き、高校生へ大学とはどのようなところなのか、我々大学生は大学で何を学んでいるのかなどのお話を高校生とさせて頂いた。

(3) 黎明学舎見学

公設公営の塾である、黎明学舎の授業風景を見学させて頂いた。塾長先生より、塾の運営方法についてお聞きすることができた。まずは、学習時間の底上げをという考え方の元、学習時間の記録をとることにより、成績の上昇・下降に対するエビデンスを3カ月かけて作成してきたということであった。また、塾に来ていた高校生たちへお話をお聞きする機会もいただき、座談会の感想を高校生からお聞きすることができた。

3事業（調査）結果と考察

地域資源調査、地域活動調査、意見交換会を通じて、青年会をはじめ地域組織にはふるさと自然・文化を基盤として様々な学び（森、川、食、暮らし、産業、交流、環境、国際など）を促進する「教育力」が存在することが明らかになった。その一方で、地域資源が未活用であり、これら地域資源を担い手育成・町外若者の誘引のために活用していく新たな方策が求められていることが浮き彫りになった。

阿賀町室谷地区の青年会及び地域団体は、室谷の活性化に向けて意欲的に活動を行っており、地域資源を活用した担い手育成・町外若者の誘引においても意欲的である。また、青年会の活動をサポートする体制として、室谷地区の区長をはじめとした地域住民、地域組織においても青年会の活動に協力的であり、大正大学、東京農業大学からの人的支援、戦略支援の体制も整っている。

阿賀町では、阿賀黎明高校及び28年9月開設の公設公営塾「阿賀黎明学舎」において、ふるさと資源を活かした教育プログラムを模索中である。町外からの新しい高校生（留学生）の誘引や都市部への阿賀町教育活動の魅力の訴求向上を図っており、地域としてのニ

ーズがあると言える。

4 今後の方針

青年会をはじめとする室谷区地域団体及び阿賀黎明高校、阿賀黎明学舎において、ふるさと資源を活かした担い手育成、教育プログラムの構築に、ニーズがあると言える。

そこで、青年会を軸とする若者育成プログラムの構築と内・外協働の学習・交流産業作り（地域活性化と青年会の若手担い手育成・誘引を相乗的に向上させる地域生業作り）を実施する。

初動段階の取組として青年会・高校生・都市大学生協働による阿賀町ならではのサービスマーケティング、キャリア教育プログラムを設定・実施していくことを予定している。来年度は、青年会を軸とした教育・交流産業モデルとして、室谷の資源を活用して高校生と共に地域学習プログラム「ふるさと学習キャンプ」（仮称）の試行実践を提案する。

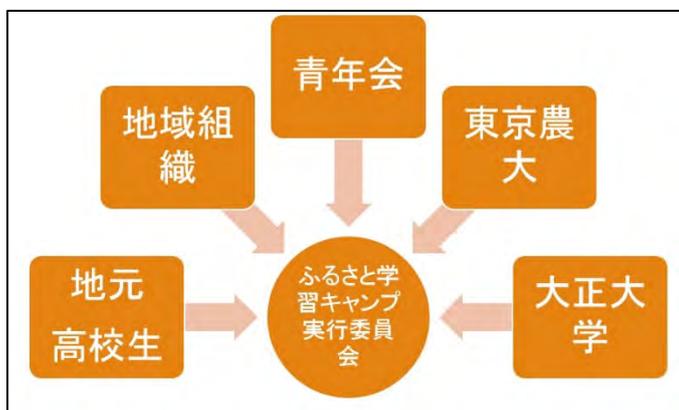
4-1 ふるさと学習キャンプについて

青年会を主体とし、地元高校生をはじめとする若い世代に対し室谷区の持つ魅力や昔ながらの生業を伝えるため、実施する。ふるさと学習キャンプの実施により、地元高校生の地域愛を育み青年会の次世代育成、地域の担い手育成を目的に実施する。

また、ふるさと学習キャンプの展開として、キャンプのプログラムの中で取り扱う食やクラフト活動を産品開発につなげることも目指す。今後、ふるさと学習キャンプの参加券や開発した産品を、ふるさと納税返礼品等として活用することも視野に入れ実施する。

実施体制としては、青年会の負担を協力減らし地元高校生や都

1日目	内容	2日目	内容
10:00	集合	8:00	起床
10:30	畑作業体験	8:30	朝食
11:30	郷土料理教室	9:30	地元学
12:30	昼食	11:30	発表会
14:00	川遊び(漁体験含む)	12:30	解散
15:30	昼寝		
16:30	活動取りまとめ		
17:30	自由		
18:30	夕食準備		
19:30	夕食		
21:00	就寝		



市部の協力者が柔軟に参画することができるよう、実行委員会形式の別組織の設立により行うことを想定する。

ふるさと学習キャンプ実施において、期待される効果として以下の4点があげられる。

- ① 地域志向
- ② 黎明学舎
- ③ 阿賀黎明高等学校
- ④ 都市部若者の誘引

①地域志向については、地元地域での主体的な活動及び多世代での交流によるメンターの発掘は、都市部に出た後にも自身の中に残るものであり、実際に地元で働いている青年のメンターがいることにより、自身の青年後の地元での生活をイメージすることができる、イメージすることができることにより、地域回帰はハードルの低いものになると考えることができる。

②③については、今後、青年会と実施するふるさと学習キャンプを活用し貢献できるような形を構築していきたい。

④都市部での自然体験に対するニーズは比較的高いと考える。広報の仕方次第ではあるが、都市部の若者をキャンプを中心とした自然体験を目玉に、阿賀に誘引することは可能であると考えられる。また、キャンプなどのイベントに参加することにより、室谷区をはじめとした阿賀町の魅力を知ってもらい、将来的には移住者の増加も見込めるのではないかと考える。

4-2 今後のスケジュール (案)

ふるさと学習キャンプへの参加をきっかけに、地元高校生の室谷区の伝統行事への参加、運営参加を目指す。

初年度は、青年会及び大学生にてふるさと学習キャンプのプログラムを作成する。初年度のふるさと学習キャンプを実行委員募集のツールとする。実行委員会設立後、実行委員会は伝統行事の運営等を青年会と運営を行う。

青年会は、主に実施プログラムの作成及び実行委員会の運営、イベント運営、地域との調整役を担う。大学は、地元高校への広報をはじめ、都市部でのPRや広報戦略の策定などを担う。

5 その他の首都圏等でのPRや波及展開活動

都市部との交流活動として、以下の活動を実施する。

5-1 コミュニティカフェ

地方地域と都市を繋ぐため、学生による活動紹介及び地方地域のPRを目的としたカフェを大正大学にて実施。

第1回：3月24日（土）実施予定

5-2 みらい館大明

地方地域のPRを目的に、都市部の団体と連携し、地域の産品を販売するカフェを1年間実施予定。都市部での経常的な販売・提供により、地域のPRはもちろんのこと、産品販売による経済活性化を促すことを目指す。

6 おわりに

今年度は、年間を通じて青年会をはじめとする地域住民の方々と信頼関係を構築し、イベント実施の体制を整える年であった。地元の青年会に皆さん方と共に提案を取りまとめていく中で、イベント実施に対し非常に協力的な関係を構築することができた。これは、青年会をはじめとする地域の方々が集落外の間人である我々を暖かく迎えてくださった結果であり、青年会の方々の室谷活性化に向けた熱意により実現できたものであるといえる。今後、青年会をはじめとする室谷区の方々と、より密な関係の構築を図りつつイベントの試行実践と波及展開策を検討していきたい。



【研究報告3 埼玉県秩父市】

「学び」で繋ぐ秩父—東京間荒川流域の連携プログラムの検討

自然・文化・歴史に光を当てる上下流域交流の可能性

—秩父市大滝地区現地調査から—



大正大学地域創生学部地域創生学科 専任講師 出川真也

文学部歴史学科 4年 角田祐基

文学部歴史学科 3年 高橋咲紀

人間学部教育人間学科 3年 大金聖人

人間学部人間環境学科 3年 荒田仁志

H28年度荒川ビジョン推進協議会「大学との連携による交流メニュー作り」委託事業により行われました。

「学び」で繋ぐ秩父—東京間荒川流域の連携プログラムの検討
自然・文化・歴史に光を当てる上下流域交流の可能性
—秩父市大滝地区現地調査から—

大正大学地域創生学部 出川真也研究室（社会教育課程担当研究室）
出川真也 角田祐基 高橋咲紀 大金聖人 荒田仁志

1. 調査研究活動の趣旨と目的

秩父市大滝地区における地域資源利用調査・活動に東京農業大学農山村支援センターメンバーとともに外部参加者として協力することを通じて、上流域（秩父）と下流域（都心）の連携・活性化に寄与する交流プログラムの検討を行った。地域活性化の軸として①地場産業育成、②食文化、③自然体験活動、④山やダムなど歴史的資源の活用といった4つの観点に着目して上下流域連携、地域活性の可能性を考察した。



写真1 現地の宿において地区の地図を広げて検討を行う（農大(左)および大正大(右)の混成メンバー）。

2. 秩父市大滝地区の概要

(1) 主な産業について

1) 林業の歴史

大滝地区は面積の9割が山林であり林業を主な産業としてきた。材木の供給地として、荒川を利用して江戸まで運ばれていた。その際、鉄砲関という方法を用いて搬入を行っている。これは林道や自動車などのインフラが整っていない時代に使われた手段であり、現在では文化的価値があるとして資料館に展示されている。

江戸時代には幕府直轄領として御山林となり、伐採等は規制されていたが、住民のための稼ぎ山として1里半（約6キロ）まで入山し8種類の材木加工品を生産し、搬出・販売することが許可されていた。

2) 鉱業の歴史

江戸時代に鉱山開発が行われ、金・銀・銅・鉄など産出された。平賀源内が鉱山開発を行っていた記録があり、現在も住居が残されている（非公開）。



写真2 秩父市大滝地区の深い山々

2) 農業の状況

農業では中津川芋・大滝インゲン、大豆加工品としておなめなどの特産品がある。しかし、土地が急峻であり、耕作は逆さ掘りという方法で行うため平地に比べ概して困難な営農環境にあると言える。

3) 観光の状況

大滝地域全体が秩父多摩甲斐国立公園に指定されている。自然環境に恵まれた土地であり、溪流釣りやキャンプ、ハイキングを楽しむことができる。また、三峰神社では御守りが人気であり、行列ができるほどの盛況振りである。一方で、宿泊業は不振で、民宿が激減している。



写真3 今回お世話になった民宿。今では集落で唯一となっている。

(2) 地区の現状と課題

主たる産業であった林業は価格競争の影響もあり衰退し、現在はほぼ行われておらず山が荒れる原因にもなっている。上下流域交流事業においては、簡易製材機を使って、山林の活用や余っている木材を使った木製三輪車作りなどを行うなど、山林振興活動に取り組まれている。

観光面では、雁坂トンネルの開通以降、通過交通が増加し滞留者が減少している。そのため、以前は民宿等も多く営まれていたが利用者の減少や経営者の高齢化による廃業が多くなっている。

鉦山開発やダム建設による就業者の増加時期以降、人口は右肩下がりに減少し、平成28年8月には約800人となっている。また、大滝地区にあった小学校、中学校はともに閉校となっており、子ども達が外に出て行ってしまう傾向がある。農協か役場以外には働く場が少ない現状であり、新たな雇用の場の創出が求められている。

3. 調査活動の内容

(1) 調査研究活動の全体日程

- 6月 平成28年度荒川ビジョン推進協議会出席
- 7月 事前調査・資料収集 現地調査のための諸調整
- 8月 大滝地区現地調査
- 9～10月 現地調査結果の取りまとめ
- 10月 豊島区生涯学習施設「みらい館大明」での研究報告と都市部住民の意見収集
- 11月 大正大学学園祭「鴨台祭」での研究報告と都市住民・学生の意見収集
- 12月 報告書作成

(2) 現地調査の内容

1) 現地調査の日程別概要

8月に行った秩父市大滝地区における現地調査活動では以下の取組みを実施した。

- 1日目：8月23日 現地入り。秩父市大滝支所にて地区概要についての説明を受ける。
- 2日目：8月24日 山村資源保全への利用を目的とした未利用トンネル整備。
- 3日目：8月25日 トンネル整備作業及び周辺山林におけるマメガキの賦存量調査。
- 4日目：8月26日 集落において郷土食・伝統野菜に関する取材とヒアリング。

2) 現地調査の日程別詳細

1日目（8月23日）現地入りと地域特徴の把握

台風の影響がひどく野外での活動ができなかったこともあり、秩父市大滝支所にて、大滝地区に関する概要説明（行政、NPO、民宿小河さん）を受けた。

役場職員は少数ではあるが、それぞれ大滝地区のことを熟知しており、台風被害の規模の推測や迅速な対応を行っていることが印象に残った。大滝地区周辺にある河川の様子を見ると、本来であれば透き通るほどにきれいな水が流れているものが台風の影響で泥のように濁っている状況だった。

今回の中心作業となるトンネルの整備は悪天候のため翌日に持ち越しとなった。



写真4 秩父市大滝支所にて地域概要についての説明を受ける。

2日目（8月24日）地域調査（自然・文化・食）とトンネル整備

天候が好転したこの日は東京農業大学農山村支援センターのメンバーを中心として、大滝地区を流れる大血川河畔に位置するトンネル整備作業を実施した。もともと大血川周辺は石灰採掘場として利用されていたことがあり、今でも名残としてトンネルがいくつか残っている。トンネル内部の気温や湿度は一定に保たれており、その特徴を生かして農産物や林産物の保存活用の可能性を検討することがこの取り組み



写真5 NPOの吉田さんから現地の概要説明

の目的である。作業内容として①土嚢作り、②足場作り、③棚の作成の3つを行った。

・地元産品保存を企図したトンネル整備作業

土嚢作りは、トンネル内の水の量を調整するのに必要なものである。現在トンネル奥に掘削機が刺さっており、その隙間を通して水が流れトンネル内部は水が溜まり、トンネルの入り口から溢れている状態となっている。そこで周辺の山土を用いて土嚢を作り、トンネルの入り口及び奥に水量調整のための土嚢を敷き詰めることとした。山の土は都心の花壇や公園の土と比べると、程よく水分を含んでいて柔らかく、粘土質のものであり、水を止めるための土嚢作りに適しているものであった。



写真6 周辺の山土を利用しトンネルで使用する土嚢を作る

この作業と並行してトンネル内の足場作りを行った。トンネル内は冠水している状況であり、水面上に足場を構築するためプレートを敷き詰める作業を行った。

土嚢による水量調整とトンネル内部の足場作り後には、農産物や林産品、加工品を保存するための棚の作成を行った。鉄パイプを組み上げた工事現場で利用されているような構造で、非常に頑丈なものである。このため実際の土木作業現場で用いる道具なども必要であり、やや難易度の高い作業となった。



写真7 トンネル作業のメンバー



写真8 冠水するトンネル内での足場づくり



写真9 保存産品を陳列する棚の設置作業

・溪流魚の利用について

昼食は地元の食材を使った定食をいただいた。大血川上流部にある管理釣り場の食堂で食べたイワナは絶品であり、釣りなどのレジャーと合わせて溪流魚資源の活用可能性が検討できると考えられるものである。

写真9 溪流魚の塩焼き参考写真
(左ヤマメ、右上ニジマス、右下イワナ)



・ダム見学

トンネル整備作業後に周辺のダムを見学した。雨があがったため水は落ち着いていたのが、まだ水は濁っていて、ダム壁の近くには大量の流木が流れ着いている状態となっていた。こうしたダムにたまる流木は炭作りに再利用されているが、近年は炭焼きの担い手となる人材不足のため、技術継承が十分にされておらず、こうした流木処分に苦勞しているとのこと聞いた。



写真10 流木に覆われたダム湖

3日目（8月25日）山林におけるマメガキ等の賦存量調査

トンネル作業を続けるとともに、栃の実を収集するための網の拡張、マメガキの調査（本数、木の状態、実用化）を行った。

・トンネルの付随整備作業

トンネル整備では内部の整備はほとんど終わり、トンネルそのものの実用性を上げるために、上の滝から水を引っ張る作業や落石・土砂対策の防護網の取り付けを行った。

写真11 落石・土砂防止のネット張り作業



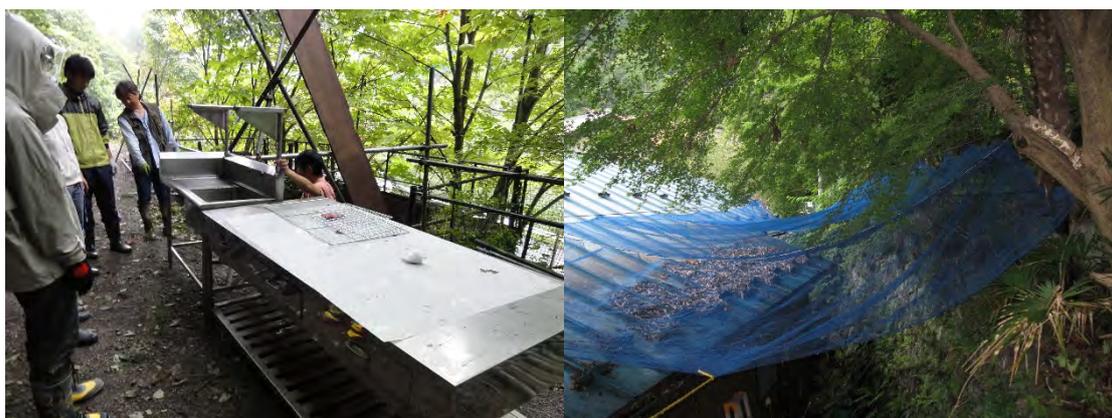


写真 12 トンネル入り口に引きこんだ水を利用
使用した加工設備の設置

写真 13 トチノミ調査のための収集ネット設置

・マメガキ調査

マメガキ調査では山に入り、賦存量調査を行ない、実のなっている木とそうでない木の区分けを行った。いくつかマメガキを枝物として採取して、生け花として使えるように、葉をとるなどの軽加工を施すなどの試行を行った。

東京農業大学農山村支援センターではこれら林産品と地域農産物や加工品等をトンネル内の棚に保存し、今後どのような変化が生じるか調査研究するとのことである。



写真 14～17(左上・右上・左下・右下) マメガキ賦存量調査 (実のなる木となっていない木の分類)、マメガキの枝採取、枝物の加工 (葉を取る)、出荷状態のマメガ木の枝物

4日目（8月26日）地区内集落における郷土料理と伝承野菜取材

地区内の集落に赴き、食文化や集落に関する聞き取り調査を実施した。山肌に沿って形成された集落は景観的にも印象的であった。地元産の特徴的な小ぶりのイモを田楽にした料理をいただいた。甘みが強くおつまみやお茶の時間のおやつとしても適しているものである。



写真 18 山の急斜面に立地する集落景観



写真 19 集落で取れる芋を使った田楽



写真 20 芋の大きさは小ぶり

集落の畑は斜面を利用したものとなっているため、平地とは異なる苦勞がある。しかし集落に住んでいる方々は高齢の方が多く、住んでいた子どもたちも高校生ぐらいからは村を離れてしまい、そのまま地元以外で生活する傾向がある。また農業以外にも民宿を経営していた時期もあったが、年々利用者が減ってしまい今では1軒しか残っていないとのこと。インタビューの中では、若者の力がほしいという要望を強く感じるものがあった。



写真 21 急斜面に立地する畑



写真 22 小石が混じる特徴的な畑土

4. 調査結果考察と上下流域交流プログラムの提案

今回の調査・実践活動を通じて、秩父の上流域と都市部の下流域をつなげるプログラムを検討するにあたって、4つの観点(①地場産業育成、②食文化、③自然体験学習、④歴史)から考察した。以下に考察結果を詳述する。

(1) 地場産業づくりー上下流域交流と「未利用資源」「再利用資源」「利用資源」可能性

大滝地区にあるもの(地域資源)をどう生かすかが今後の地域づくりのカギとなると考えられる。地域資源を使って産業を作り、雇用を生み出すことができれば若者の流出を防ぐことにもつながるのではないだろうか。

地域資源としては、かつて使っていたが、現在は十分に使われてない「再利用資源」や、これまで使ったことがなかった「未利用資源」をどう生かしていくかがポイントになる。前者はかつての経験や知見があるが、新たな要素を付け加えて価値づける必要があり、後者はこれまでの実施経験・知見がない新たなチャレンジといえるだろう。また現在使われている資源(「利用資源」)の高度利用も検討の余地があると考えられる。

1) 「再利用資源」活用による既存産品と連動した地域産業開拓の可能性

今回の調査においては、具体的な再利用資源としてトンネルの活用が注目される。もともと大滝地区は鉱山として栄えた村であり、その作業跡として現在使われていないトンネルがある。トンネル内部の室内温度は13℃前後で外の天気や気温の影響を受けないため貯蔵庫として好適であると考えられる。このトンネルを整備し、貯蔵庫として活用することで、保存品を熟成させて付加価値をつけることが期待される。熟成させる物としては地域で作られているジャガイモや焼酎などが考えられる。トンネルに一定期間保存し、熟成等による価値づけを行った商品として販売することができれば、農業だけでなくトンネルの貯蔵庫業としての雇用を作っていくことができるのではないかと考えられる。また、付加価値商品を下流の都市地域に販売するなど流通面でもさらなる雇用の増加につながる可能性があるのではないかと考えられる。

2) 「未利用資源」の活用 - マメガキを通じた山の手入れ作業と防災交流の可能性 -

未利用資源としては、マメガキが挙げられる。これを生け花や柿渋として販売することで、地域にお金と人を生み出すことができるのではないかと考えられる。生け花として販売する場合すぐに出荷しなくてもトンネル保存によって時期を調整することで、需要に応じた販売を行うことができる。また、マメガキは地区内に数多く生育しており、これを山仕事の一環として整備していくことは、マメガキの商品としての産業化だけでなく、山の手入れを促すことにつながり、結果として山林の防災上の効果が見込めるのではないかと考えられる。これは下流域にとっても防災政策上メリットがあるものといえる。

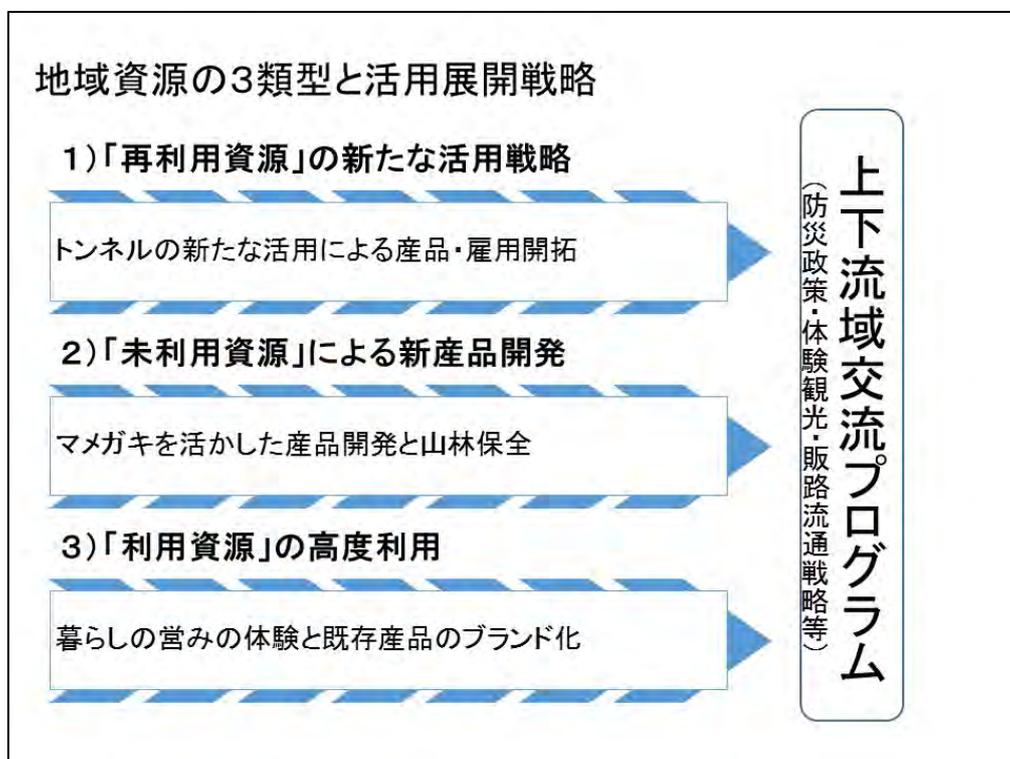
こうしたストーリーから考えると、上下流域の連携のシンボルとして、マメガキを軸とした山の手入れ作業やマメガキの販路として都市が協力することが考えられるのではないだろうか。いわばマメガキを通じた防災交流プログラムである。

3) 「利用資源」の高度利用について－体験を通じた利用の可能性－

現在利用されている資源の高度利用策としては、大滝地区における農業や林業体験が考えられる。農業においては、急峻な土地環境のため平地とは違った苦労や工夫がある。そのギャップを逆手に取った山村ならではの農業体験（逆さ掘り体験ツアー）が考えられる。

こうした体験を、現在実施されている都市住民が来訪して行っている簡易製材機を使った林業体験と組み合わせることで、上記「未利用資源」「再利用資源」の活用と合わせて総合的に地域資源を活用し、発信力を高めていくことができるのではないかと考えられる。

にぎわいをつくり出すという点で「体験」活動は有効であると考えられる。ただ体験をしてもらうのではなく、地域の日常的な作業を体験プログラムとして設定したり、耕作放棄地となっている場所を利用してもらうなど地域ニーズに合わせた工夫をすることで、地域の人手不足に対する対応や土地の有効活用にもなるのではないかと考えられる。



以上のように、大滝地区の資源を「未利用資源」「再利用資源」「利用資源」の3類型からそれぞれ上下流域交流の視点からその特徴に合わせて戦略的に利用していく方策を考えられるのではないかと。次節からは、食文化、自然体験、歴史といった3つの軸から具体的なプログラムについて検討する。

(2) 食による上下流域交流の可能性－「料理」「定期市」の利活用可能性－

1) 下流域では調達できない食材の特徴

① 溪流魚 イワナ・ヤマメ

秩父において着目されるものとして独特な「食文化」があげられる。大滝地区には埼玉県

および東京都を流れ東京湾に注ぐ荒川の源流があり、イワナやヤマメが生息している。シーズンになると溪流釣りを楽しみに多くの観光客が訪れる。釣った魚は塩焼きにして食べるとおいしいことで有名である。

②農産物 伝統野菜：中津川芋・大滝インゲン

大滝地区の代表的な農産物ともして、中津川芋・大滝インゲンがある。中津川芋は、私たちがよく見るジャガイモと比較するとかなり小さい芋である。大きいもので5cm、小さいものは3cmほどである。大滝地区ではこの芋を油いためや田楽にする文化がある。中津川芋は、日露戦争の時に極東ロシアに抑留されていた秩父市大滝出身の兵士が持ち帰ったといわれている。肥料を与えずに作るため、標高の低いところで作ると大粒になり、皮の赤色が淡くなってしまふといわれている¹。下流域部の都市では、標高が低いため大きな芋しか育たず、色も変化してしまふため、希少性の点でも中津川芋は魅力的だと言えるだろう。

大滝インゲンは、味の感じ方に個人差はあると思うが、非常に甘く、苦みが少ない。これほどの甘さを持ったインゲンは下流域では珍しいのではないかと考えられる。

③加工品 おなめ

「おなめ」は秩父味噌とも呼ばれ、重厚な味で味噌の香りが強く、旨みが強いのが特徴であり、秩父市の名産としても知られている。

2) 農業の衰退（高齢化・後継者不足）と厳しい自然環境

大滝地区の食文化について簡単に触れたが、その基盤となる農業は実際にはそれほど盛んに行われていない現状がある。その理由は、現在農業を営んでいる住民の高齢化が進んでおり、後継者もいないということが挙げられる。また、大滝地区は辺り一面が山で囲まれており、農業に適した土地が非常に少ないという地形的特徴を持っている。そのため、山を拓いた急斜面で農産物を生産している。秩父市全体でみても畑などで使われている土地はわずか5%しかないのが現状である。しかし、この量的には少ない農産物も活用の仕方を工夫することで、下流域である東京都との交流を図ることは不可能ではないと考えられる。

3) 大滝地区の「料理」を下流域に売り込むという戦略

①「料理」によるPRと活用

農産物そのものではなく「料理」とすることで、付加価値を付けた食文化の発信可能性を探ってみたい。

大滝地区の名産である中津川芋・大滝インゲン・おなめやそれを使用した料理で交流を図ることができると考えられる。この名産を使用した代表的な料理の一つとして中津川芋の味噌炒めがある。調理法は、湯がいた芋を油でいため、味噌と砂糖でからめる。その後お好みで黒砂糖による味付けをするといったものである。他にも魅力的な料理は多々ある。

料理を下流域に売り込むことで、都市部のレストランや学校の食堂、さらにはスーパーマーケットなど様々な場所で交流が生まれる。こうした下流域のレストランや食堂、スーパーマーケットなどで利用されることで経済的効果を生み、上・下流域の双方に利益がもたらさ

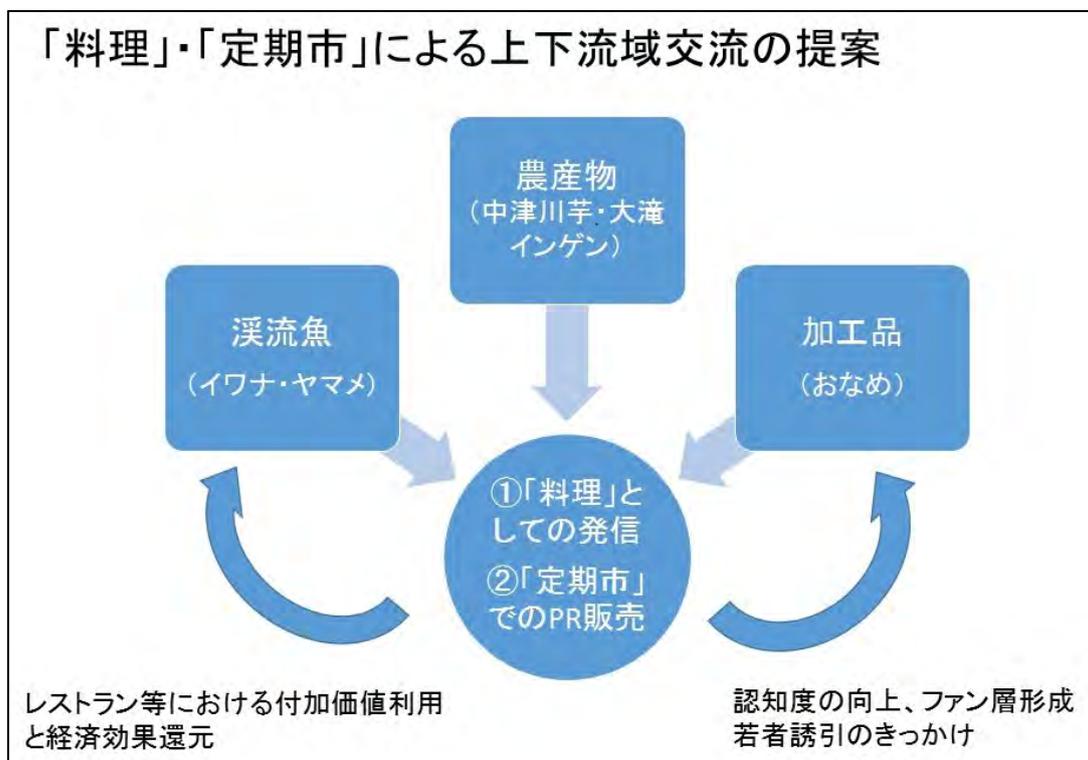
¹ <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0904/jibayasai.html> 2014年3月17日掲載

れるのではないかと考えられる。

②定期市を利用した販売促進

大正大学では、定期的に「朝市」という地方地域の産物を販売するイベントを行っている。こうした都市部の地域商店街に根ざした定期市で秩父市の農産物を売り込むというのも1つの方法ではないかと考える。大滝地区の名産は、下流域の人々にほとんど知られていない現状では定期的な機会を利用したPRは効果が高いと考えられる。

また後継者不足に悩む現状において、下流の都市地域の若者たちとの接点を増やすことは、少しでも後継者となりうる関心のある若者をつながりをつくる上でも有益ではないかと考えられる。



秩父市大滝地区の今まで知られていなかった素晴らしい食文化を基軸にした交流活性化策として、「料理」化によるPRと定期的な市の利用した販売を提案したい。

(3) 自然体験 -ありのままの自然に触れて子どもたちの自然の再認識を図る-

1) キャンプ場、林間学校ハイキング、溪流

現在の大滝地区には、民間企業によるキャンプ場がいくつか点在している。夏季のみの営業だが、子どもたちが自然に触れ合える機会の1つとして挙げられる。また林間学校として大滝地区周辺からハイキングをすることといったことが夏季限定ではあるが行われている。

地区内を流れる荒川及びその支流での自然体験については、昔は遊び場として子どもたちが集まっていたが、現在では釣り場としての利用以外はあまりされていないようである。このように子どもの自然体験活動として夏の期間以外には継続的な実施があまりなされて

いない様子も垣間見られる。

一方で、山の地形を利用したバイシクルモトクロス(以後 BMX)やランニングバイクというスポーツが盛んに行われており、幼児から小学生の子どもたちが参加している。広大な自然を有しているという地域の特徴を活かして、従来の発想にとらわれずに、新たなスポーツやアクティビティを含めて、地域の自然利用の可能性を探っていく必要があると考えられる。

2) 険しい自然環境をいかに生かすかー都市住民とのギャップについてー

大滝地区は周りを山々に囲まれ河川が複数流れる自然豊かな場所であり、その自然環境にそった生活や作物などが存在している。このため自然体験をする場所として十分な価値があると考えられるが、一方で都市部と山村における自然観の違いといったギャップ、とりわけ都市住民(子どもたち)が山や河川を利用する際にどのように安全面で配慮するかが課題になるのではないかと考えられる。

本節の執筆担当者(荒田)は都会生まれ都会育ちである。自然が奥深い大滝地区を訪れてみて懸念されることは、単純に自然を重きとした体験プログラムを組んでしまうことにより、都市住民が抱いている自然の規模や体験の度合いの許容量を超えてしまい、かえって敬遠されてしまう可能性があるのではないかということである。

山も川もなく、ビル群の中で生まれ育った人にとっては等間隔に植えられた街路樹や公園にある幾つかの木のことを「自然」であり、自然体験は水族館や動物園といった管理され区切られた安全な場所で「観る」という動作だという程度にしか考えられていないかもしれない。少なくとも筆者はそうであった。一方で大滝地区では、自然は住んでいる環境そのものであり、自然と共生する日常そのものが自然体験と言えよう。

このように都市住民と山村住民では、生活圏や価値観が大きく異なっているため、地域の生の自然や暮らしをそのまま子ども向けの自然体験プログラムを設定しても、あまりの違いから危険と判断される可能性もあるのではないか。大滝地区のような場所に都市の子どもたちを迎えるなら、①自然に対する脅威、②その中で活動するための知識や方法、③自然に対する理解をしてもらう、など都市からの参加者側の目的や知識・スキルに応じた事前の準備学習のようなプログラム設定が不可欠であると考えられる。

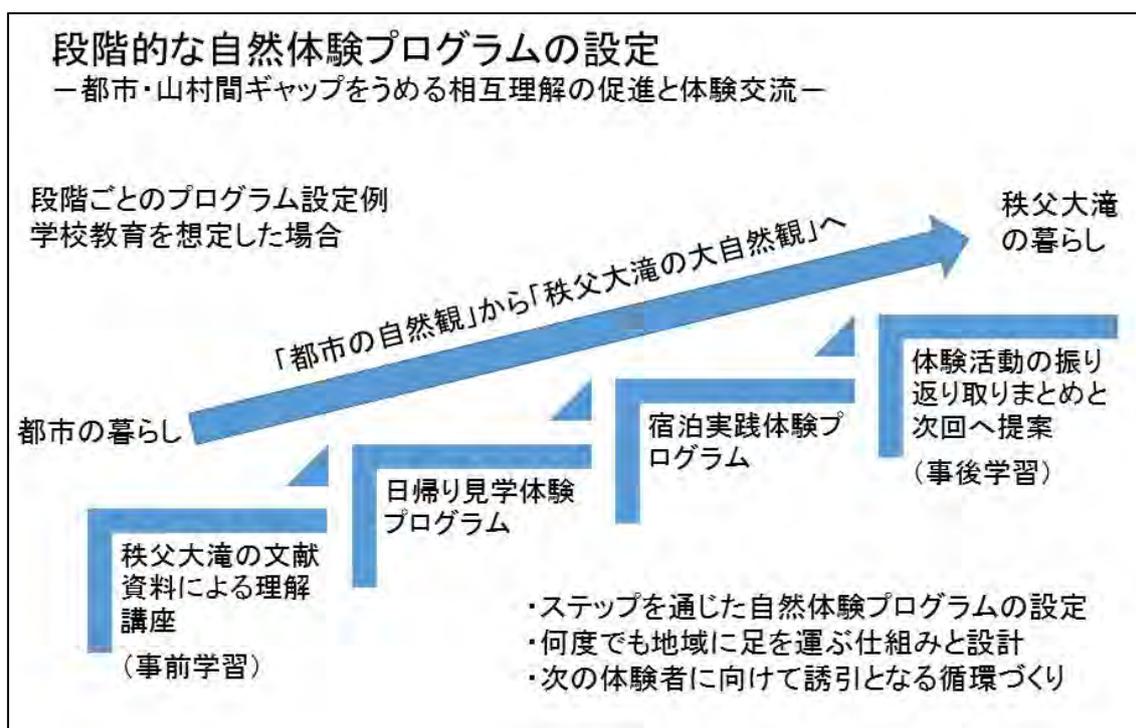
3) 相互理解と段階的な体験プログラムの設計

大滝地区の自然を利用した体験活動事業を立ち上げるとするならば参加者たちとの相互理解を得ながら徐々に実行していくことが重要だと考えられる。

そのための方策として自然体験を段階的に分けて実行するという企画を提案したい。何回かに分けて秩父について学んでいただき、その回数に応じて体験活動の要素を増やすというプログラムを実施していく。この方法によりそれぞれの知識・技術の到達度に応じて抵抗なく体験プログラムに参加してもらうことが可能であり、また目的性を持って何度も地域を訪問することができるようになると考えられる。

例えば、都市部の学校教育での利用の場合、子どもたちに、①都市部と大滝の自然の文

献調査、②大滝地区に赴いてどういった自然環境かを見に行く、③実際に宿泊してどのような生活を行っているか体験するというような3段階のステップを踏むことが考えられる。さらにこれらの3プログラムの体験結果を模造紙等にまとめてもらい、次の参加者の参考にするようなかたちでプログラムを継続できるサイクルが組んでいくことなどが考えられる。こうした段階的にリピーターを誘引するプログラム設定を工夫することがポイントだといえる。自然への認識を深めながら継続的に大滝地区へ人の流れを作るような仕組みが求められている。



大滝地区は、自然豊かな山と川を保有していることから、多種多様な体験が行える可能性があり、求められるレベルや需要に合わせることができないのではないか。段階ごとに多様なプログラムを設定することができれば、都市近郊における代表的な自然体験地域として位置付き、上下流域連携・交流の活性化につながるものになるのではと期待される。

(4) 歴史-隠れた歴史を発信し、他地域からの興味関心を引き出すために-

1) ダムの歴史を活かした交流プログラムの可能性

現在、秩父市には二瀬ダム、浦山ダム、滝沢ダム、合角ダムの4つがある。荒川の源流部に建設され、下流である都心部を守っている。このためダム建設にまつわる興味深いさまざまな歴史があるのだが、単にそれを掘り起こすだけでは、地域活性化の事業には繋がりにくいと考えられる。

しかし近年ダムが新たな形で着目されている。例えば、ダム巡りをしてネット上でそれを紹介する、いわゆるダムマニアの活動がある。ネット上の活動はもちろん、写真集や本

を出すなど活動の場を広げている。最近では、ダムを曲を集めた音楽アルバム（CD）が出たり、ダムの日本画を描く女子美術大学生が現れたりなどしている²。

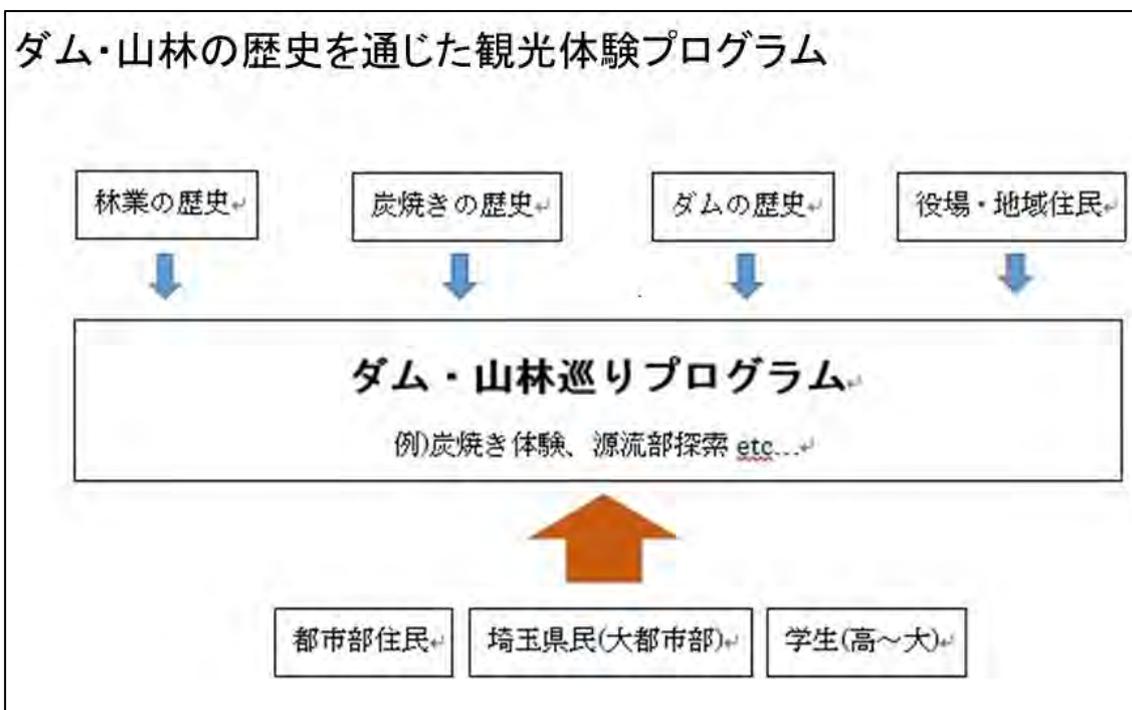
こうした新たなダムの利用方法と合わせながら、ダムの歴史に着目させて、ダムの本来の機能の発信に寄与できるようなプログラムが考えられるのではないかとと思われる。

2) 山林の歴史を利用した交流プログラムの可能性

大滝地区では、主な産業として林業が行われており、伐採した木材は川の流れを利用して東京湾まで運ばれていた。また、江戸時代には伐採などが規制されたが住民のための稼ぎ山として、材木加工などが許されていた。

炭焼きなどを生業としている人も過去にはいたが、その技術を伝えている担い手が少なく、このままでは技術はなくなってしまうことが懸念される。今回、実際に炭焼きをやっていた方に話を聞く事ができなかつたため、詳しい歴史を知ることができなかつたが、このような技術は代々親から受け継がれているということである。今後は新たな形での技術継承・担い手づくりが求められる。

山林資源がほぼ国有林であるということも重なって、単体では生業とすることが難しいため、観光分野と連携した活用方策も検討すべきではないかと考えられる。例えば山林とダムと併用して、都市部の人々に森や山村の中を見て周り、荒川源流がどのような場所か、ダムがどのような役割を持っているのかを知ることのできるプログラムが考えられるのではないだろうか。



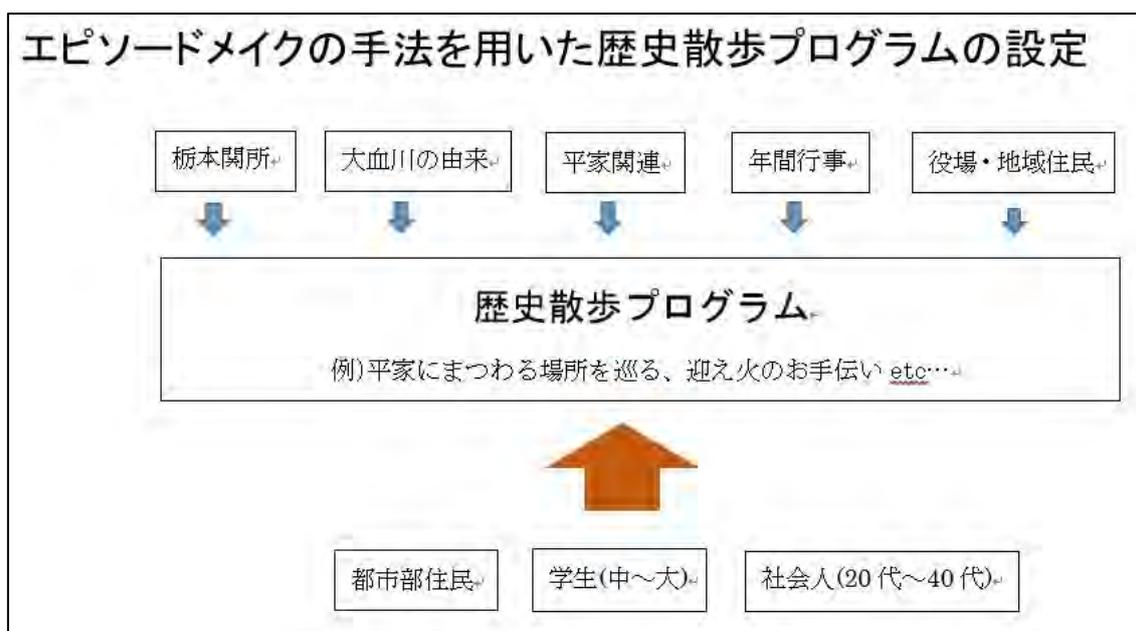
3) 歴史的利用資源の可能性 - 地域伝承などエピソードメイクの手法を取り入れて - その他歴史的資源として栃本関所、大血川の名前の由来などが挙げられる。

² <http://damnet.or.jp/cgi-bin/binranB/Konogoro.cgi?id=293> 2016年12月4日閲覧。

栃本関所は、江戸に向かう際の重要な交通の関所となっていた。かつては、平家も通っていたと言われている。現在は個人の所有ということで、観光名所としては活用されていないようであった。

大血川も、平家にまつわる伝説によりつけられた名前のである。そのため、この2つを融合した歴史散歩のようなプログラムを立てることができる可能性がある。したがって、それぞれ資源単体の歴史だけではなく、その周りや当時の様子を踏まえて、ストーリー化させることが重要課題となるのではないだろうか。この点で、エピソードメイク³の手法の導入も有効であると考えられる。

また、現在は栃本関所から近くの畑に向かってろうそくをつける「迎え火」と呼ばれるイベントを行っている。地元の方の話では、とても明かりが綺麗で今後も続けたいとのことだった。このことから、迎え火の活動を都市部の人たちでお手伝いするプログラムも考えられるだろう。加えて、迎え火以外の行事も外の人に関われるものがないか追加で調査をする必要がある。



5. 総括

(1) 現地調査の所感から

3泊4日という短い期間ではあったが、見たことのない自然や生活環境を自分なりに知ることができた。都内から電車で2時間ほどしか離れていない場所なのに山々に囲まれて水も綺麗な環境が存在しているということに驚いた。大滝地区自体はとても小さな地域だ

³ 地域の歴史を活かして、その地域のブランディングをすること。これらの情報を広く発信することで、研究者や歴史に興味のある人たちを呼び込める可能性も秘めている（専修大学経営学部森本ゼミナール2016）。

ったが、人と人との連携が強くとれており、住民の方々から話を聞くほどこの土地でしか行われていない風習や伝統技術、食文化を知ることができて有意義な4日間になった。他の地域や都市部にはおそらく知られていないものばかりなので、他地域から興味関心を抱いてもらうには十分な力を秘めていると感じた。

(2) 総括と今後の展望

本報告書では、現地調査を踏まえながら、大滝地区の地域資源を「未利用資源」「再利用資源」「利用資源」の3類型に分け、上下流域交流の視点から、それぞれの特徴を活かした活用可能性について検討した。その上で、食文化、自然体験、歴史資源の活用という観点から、上下流域交流プログラムを検討し、いくつかの試案的提案を行った。

全体として見えてくることは、交流プログラム設定のプロセス自体に下流の都市部地域住民がかかわり共に創り上げていくということが大切であるということである。かつて、上流部と下流部は密接な関係があったが、それは一言で言えば人と人とのつながりあいであったといえよう。

今日、都市部と山村のつながりにおいて防災行政といったハード的側面が求められている一方で、山村の人々と都市の人々との人情味豊かな交流も求められている。本報告書で試案として提起した交流プログラムがそうした上下流域交流という新たな「近所付き合いの風景」を創生していくことに寄与することを願っている。

参考文献・資料

専修大学経営学部森本ゼミナール(2016)「大学生、限界集落へ行く『情報システム』による南魚沼市辻又活性化プロジェクト」専修大学出版局

黒沢和義(2011)「山里の記憶1」同時代社

国土交通省関東地方整備局(2016)「荒川水系荒川、入間川、越辺川、小畔側、高麗川及び都幾川について、想定し得る最大規模降雨による洪水浸水想定区域を指定・公表します」記者発表資料

国土交通省河川局河川環境課 2005「上下流域連携促進のための普及啓発支援ツールの検討業務」報告書

おわりに

文学部歴史学科 3年 高橋咲紀

1、私にとっての地域との出会いと学び

今回、本書において締め言葉の寄稿させていただくことになりました。私も本書の中で、実習における報告書を書かせていただいております(第1部、第1章)。私は社会教育主事の資格取得を目指していたものの、担当教員である出川真也先生にお会いするまで、社会教育・生涯学習に関することは何一つ知りませんでした。しかし、授業を受けていくうちに、社会教育とは何か、ファシリテーションとは何かなど、生涯学習を行っていく上で重要な知識や手法を学び、学んだことを実際に現地で活かしてみたいと考えるようになりました。

このことがきっかけで地域の皆様のご協力もいただきながら、様々な地域で活動をさせていただきました。本書にある、新潟県粟島浦村、阿賀町室谷地区、埼玉県秩父市大滝地区、東京都豊島区、滋賀県近江八幡市は実際に私も訪問し、学習・実践を行った思い出の場所でもあります。

2、実習・研究報告の総括

簡単に各章を振り返ってみたいと思います。第一部では、「社会教育施設実習」という社会教育主事資格取得のための講義を受講した各学生がそれぞれ自分の興味や関心分野をもとに全国各地の実習先を決定し、意欲的に活動を行い、その活動で学んだことを報告しました。

高橋(第1章)では、地域の自然を利用して社会教育活動を行っているスタッフの動きに着目して実習を行いました。活動の対象者によって、学習支援者としての面と、ファシリテーターとしての面があるということを学んでいます。誰と活動をするかにより、行動やコミュニケーションの仕方を変えるというファシリテーションの実際の方法を体験することができました。また、『ヨソモノ』として住民のニーズをどのように把握していくのか、そのニーズをどのように解決していくのかを実際の人と人との関わりの中から学びました。

鶴岡(第2章)は、親子での視点の違いに軸を置いて実習活動を行いました。都心に住んでいるため自然に触れさせたいという親のニーズと、自然において様々なものに興味関心を持つ子どものニーズ、さらには、興味を持たない子どものニーズがあります。これら多種多様なニーズに寄り添うことには難しさがありバランスとメリハリが重要であるということ、実際に一緒に活動することで発見しました。

眞野(第3章)は、豊島区における主に定年退職者対象となっているエリアガイドボランティア事業の運営側として参加し、彼らが地域と関わりながらどのように活動しているのか、その活動までにはどのような学習が行われているのかなど社会教育活動における学習の仕方の違いを踏まえながら述べています。活動を進める上で最適な学習方法とは何か、個人

学習と集団学習の両方を利用しながら学びを深めている様子を実際に見て、理解をさらに深めています。また、今後課題になるであろう問題にも着目し、粗さが残るものの建設的な解決策を提案している点については、活動に実際に参加したことで考えることができたものであるといえます。

藤井(第4章)は地域活性化において、図書館がまた図書館司書がどう関わりうるのかという観点から実習を行いました。近年では図書館、博物館などが館内業務だけではなく、地域との連携していくことも重要視されています。ここでは、図書館だけではなく、地域の商店や記念館など他の施設との連携・協力の重要さも述べられています。こういった施設間連携は、地域活性の上で必要になってきます。報告書にも述べられていますが、今後の図書館というのは、地域の知的拠点の一つとして町のまとめ役・仲介役としての役割も担っていくことが求められています。

戸澤(第5章)は、定年退職者による地域の環境や文化的資源を活かした学習と地域づくりについて学びました。生涯学習とは、小さな子どもから高齢者まですべての人の学びであったり、趣味や生きがいとなるものなど非常に幅広い領域を含んでいます。この実習を通して、「おやじ」たちによる「生涯学習」がどのようなものであるかを理解することができたと述べられています。

第2部では、出川真也先生を中心に研究活動を行っている3地域についてまとめられています。

新潟県粟島浦村の活動(第1章)については、首都圏との連携や、島内外の人材が関わることのできる新たな生業創出という点をもとに構想したお手伝いプログラムの試行実践について述べています。実践の結果から島の学習資源を真に生かすために島の子どもたちと関わらせていただいた中で、島のおじいちゃんおばあちゃんと子どもたちをつなげていくことを提案しました。

新潟県阿賀町室谷地区での活動(第2章)では、地元の若者と我々大学生が連携してイベントを行えないか模索しました。「ふるさと学習キャンプ」を題材に地域の若者たちの横のつながりを強めて、担い手と地域活性化を実現しようと提案しています。

埼玉県秩父市大滝地区(第3章)は、4人の学生がそれぞれの関心分野から、荒川上流域である大滝と下流域である都市部とどう連携することができるかということを実際に現地に入り、体験を通じて考え、各学生が具体的な連携方法を提示しました。実際の活動にどのようなつながることができるかが今後の課題です。

3、学生へのメッセージ—フィールドワークにおいて忘れてはならないこと—

全体を通して述べられていることは、コミュニケーションの大切さと外部者として地元住民とどのように関わるかが重要かということです。私はこの2つは繋がっているものだと考えています。コミュニケーションを取ることによって、地元住民の考えがわかってきます。そこを理解したうえで、どのように地域と関わっていくか、どのように住民の皆

さんと活動していくかを考えていくことが重要なのではないのでしょうか。こちら側が一方的に押し付けることは、社会教育でも何でもありません。今回参加した学生にとって、社会教育主事ないしコーディネーター、ファシリテーターの地域や団体のニーズを引き出し、人同士をつなげるという役割の一端を実習を通じて学ぶことができたのではないのでしょうか。

今後、実習等で地域に実際に入って学ぶ際に、先輩方が学んできたことも踏まえながら自らの実習に役立てていただければと思います。

**地域に根差した学びと地域づくり
—新たな参加・実践の在り方を考える—
平成 28 年度生涯学習施設実習・課外研究活動報告**

発行日 平成 28 年 3 月 31 日

発 行 大正大学社会教育主事課程

〒170-8470 東京都豊島区西巢鴨 3 - 20 - 1

印 刷 株式会社ティール・マップ

